
侍とテストと召喚獣

黒夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侍とテストと召喚獣

【Nコード】

N5811M

【作者名】

黒夜叉

【あらすじ】

文月学園2年生の黒川クロカワ輝アキラは真選組に所属してる。過去のトラウマを引きずり、仲間を作るのをはじめは拒んでいたが、自分の存在を認めてくれる人達に出会い人生が変わりだす。そして様々な人との出会いの中、彼はいつしか大切なものを護るようになる……。銀魂とバカテスのクロスワールドがここに誕生！！
初めての作品なのでおかしいところもあるかもしれませんが、お許しください。

あらすじの内容を少し変えました。

ブログ 「日常と非常は表裏一体」(前書き)

はじめまして。黒夜叉といいます。

友達に影響されて最近バカテスのオリジナルストーリーを書くようになりました。

メッセージ性が強くなったりするところもありますが

あまり重く受け止めないでください。(笑)

忙しいので、小説の更新は基本かなり遅いかもしれませんがご了承ください・・・。

プロローグ 「日常と非常は表裏一体」

春。この文月学園へと続く坂道は桜が咲き誇り、とても幻想的に見える。

ほとんどの生徒はこの道を通る時、新しいクラスやこれから起こる出来事に

胸をときめかせるだろう。また、仲の良い友達と他愛の無い話に花を咲かせているのかもしれない。

ただ一人を残して・・・

「ふあゝあ・・・」

あくびの主である少年は眠たそうにこの道を歩いていた。

少年の名は黒川クロカワ輝アキラ。今日から2年生である。

彼が眠いのもそのはず。何を隠そう彼は真選組の十一番隊隊長なのである。

主に痴漢、万引きなどの防止のために夜の街の見回りを行っている。彼が眠たいのは当たり前なのである。

輝サイド

くそゝ土方さんめ。昨日あれほど「明日から学校ですー!」って言ったのに

なんで見回りから帰ってきた瞬間書類の整理をさせるんだよー!

おかげで3時間ぐらいいしか寝られなかったじゃないかー!

これぐらいの年頃は6時間ほど寝るべきなんだよー!!

俺が土方さんに対して頭の中で怒りをぶつけていると、前方から笑い声が聞こえてきた。

ふと顔を上げると数名の男子が楽しそうに話しているのが見えた。

（俺にも昔あんなときがあったなあ・・・）

きつと今の俺の顔は哀愁に満ちているだろう。

他人が見たら、きつとじじくさいと思うかもしれない。

しかし、今の俺には学校に友達などいなかった。

決して好きでこんな風になったわけではない。

すべてはあの事件から始まったのだ・・・。

「はあ・・・」

思わずため息が出てしまった。

本当は俺だって友達を作りたい。

だが・・・。

そんなことを考えていると、いつの間にか目の前に校舎があった。

校門をくぐると、玄関の前に「鉄人」こと西村先生がいた。

「鉄人」と呼ばれる理由？俺は全く知らないぜ

「おはようございます。鉄人28号」

「・・・黒川。俺の耳がおかしくなかったら、ロボットの名前が聞こえたんだが。」

「すいません。まちがえました、鉄道オタク」

「どうまちがえたらそうなるんだ？しかも訂正の意味がないだろう。それに俺は鉄道には興味がない。」

うーん……。鉄道オタクの略だと思ったんだが……。

「後で職員室に来て「すいませんでした。西村先生or_z」……
わかればいい。」

ふう、危なかった。ここで地獄行きが決定すれば、駐屯所で身が持たない。

ん？よく見ると鉄人が封筒を持っているんだが。

「先生。それはクラス分けの紙ですか？」

「ああ、そうだ。そしてこれがお前のだ。」

そう言って鉄人は俺に封筒を渡した。

まあ、クラス分けなんて本当はどうでもいいんだがせめてC以上がいいな。

歴史は上手くいったし、数学もまあまあだったからなれるかもしれないな。

英語・化学は別として……。

そんなことを考えながら封を切つて、紙を見た。
緊張の一瞬だ。

『黒川 輝……Fクラス』

「お前、歴史は全問正解だったのに名前を書き忘れていたぞ。
それに数学は単位が抜けていたり、計算ミスを多くしていたぞ。
それが無ければBクラスだったんだが……。」

ふふふ……。あとで沖田さんをやらないとな。
殺

ブローグ 「日常と非常は表裏一体」 (後書き)

最初の方は、オリキャラを原作介入させるつもりはありません。

黒川の過去。これがさいしょのほうではカギとなってきます。

主人公設定（前書き）

少し加えました。

主人公設定

名前 クロカワ アキラ
黒川 輝

身長 175 cm

顔 髪形は土方に近い。死んだ魚のような黒い眼をしている。
顔立ちは整っているほうで、ルックスはいいほう。

誕生日 9月6日

性格 基本やさしくて強い正義感の持ち主だが、少しS。
ただしキレると沖田並みのSになる。
表面上めんどくさがりだがかなりの努力家。

召喚獣 銀さんの白夜叉バージヨンの黒色。

武器は本人と同じ少し青みがかかった日本刀。

得意科目は歴史で、Aクラスもしくは教師レベルである。
苦手科目は英語と化学。

剣の腕前は真選組でも上位クラス。
剣は名刀と呼ばれる「斬波刀」ざんぱとうで、少し青みがかかっている。
料理は得意ではないので、家ではほぼ毎日コンビニ弁当か菓子パン。
しかし、学校・駐屯所にいるときは食堂で食べている。
両親は仕事の関係で海外にいる。

真選組十一番隊隊長で、あだ名は孤高の狼。

主人公設定（後書き）

がんばってまとめました。

この世界での銀魂の設定は原作と少し異なりますが、それは物語の中で書いていきたいと思っています。

第一訓「事の前の日には気をつける」（前書き）

バカテスト 【化学】

問 『調理のために日にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ上げなさい。』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険である
という点。』

合金の例・・・ジユラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』ではだめという引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

黒川輝の答え

『合金の例・・・鉄』

教師のコメント

思惑どおりに引っかかってくれましたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（↑^{すぐ}強い）』

教師のコメント

すぐ強いといわれても。

第一訓「事の前の日には気をつける」

輝サイド

「な．．．何なんだここは．．．」

俺は今、Fクラスを見て呆然としている。

一瞬、廃墟かと思ったぞ。

椅子の代わりに座布団、机の代わりに卓袱台^{ちゃぶだい}．．．。

しかもところどころ壊れかけた窓や壁。

まさかこれが教室なんて．．．。

噂で聞いてはいたがここまでとは．．．。

これなら駐屯所のほうがましだ。

Aクラスはものすごい設備らしいが俺はAクラスの教室を見に行っていないのでわからない。

というか見たくなかった。

余りの差にきつとショックを受けるから．．．。

意を決して中に入ってみたが．．．ものすごくカビくさい。

畳がひどく傷んでいるというか腐っているよね、コレ。

駐屯所から余りを持ってこようか。

まだあつちは汗くさいだけだからマシなはずだ。

教室には生徒が数名しかいなかった。

しかも、誰一人として知らなかった（っていうか、まず学校に知り合いすらないから当たり前なのだが）ので、とりあえず窓側の一番後ろ卓袱台に伏ってして眠ることにした。

そして俺はそのついでに沖田さんをやる方法を考えていた。

なぜ沖田さんかって？それは・・・

（試験前日）

「アキラ」

「はい？」

俺が帰宅準備をしていると沖田さんに呼び止められた。

沖田さんは真選組の一番隊隊長で、かなりの剣の腕前を持っている。しかもかなりの美青年で、女性に人気があるのだ。

しかし、その甘いマスクとは裏腹に腹黒・毒舌で、ドSな性格の持ち主である。

性格を直せばきっと今よりかなり持てると思っただが・・・。

「今、なんか変なこと考えていやせんでしたかい？」

「い・・・いや、別に」

バレたら命が無かった。

「ところでなんでしょうか？」

「実は今日、ラッキーなことに見回りの人数が一人・・・」

ダッ！！（輝が逃げる音）

ガシッ！！（沖田が輝の肩をつかむ音）

「・・・何で逃げるんですかい？」

「いや、明日は試験なんで早く帰ろうと思ひまして・・・（汗）」
かなり嫌な予感がある。

「仕事をほったらかして自分のことですかい？土方に怒られやすぜ

「イ」

「残念ながら土方さんから許可はもうもらっています」

これなら絶対逃げれると思ひ、俺はそれではと言って帰ろうとした。しかし沖田さんは手の力を緩めなかった。それより逆に強くなった。「・・・すいませんが、手をどけてくれませんか？」

「そいつはできねエでさア。なぜなら、輝は俺の許可をもらってねエんでさア」

なんて勝手な理由だろうか。

だがここで引き下がってはいけない。俺の運命がかかっているんだから。

「沖田さん。土方さんは副長ですから、沖田さんより位は上ですよ？」

「あいつアいつか俺が失脚させるんでさア。だから俺は副長でさア」
「な・・・なんて理不尽なんだ・・・。」

「ということで輝。ついてくるんでさア」

「イ・・・イヤだ！！俺には試験という任務が・・・」

逃げようとする沖田さんは懷から何かを取り出した。

ガチャリ

ん？今なんか変な音がしなかったか？

音のした方（首）におそろおそろの手を持っていくと・・・首輪があった。

「逃がしやせんぜエ、輝」

「だ・・・誰か助けてくれエッ！！」

俺は必死になって叫んだ。

「残念ながら今ほとんどの奴は風呂に入っていますぜイ」

「は・・・はかりましたね?!」

そういうと沖田さんはニヤリ、と不気味な笑みを浮かべた。

「じゃあ、ついてくるんでさア!!」

そついうと沖田さんは首輪についている鎖を強引に引っ張って行った。

「ちよつ・・・沖田さん!!く・・・首が・・・ぐへっ?!し・・・試験が・・・うつ?!」

その後俺は何度も首が締まりそうになりながら夜中まで見回りに付き合わされた。

しかも解放されて家に帰ったものの、首が痛くて全く眠れなかった。

・・・

というわけなのだ。

だから俺は試験当日、眠くなって何度ミミズがはったような文字になつて消しまくったことか。

さらに、そのために集中力を欠いたためケアレスミス勃発・・・。

こんなことになったのはすべて沖田さんのせいなのだ!!

さて、どうやってヤろうか。^殺

刀で後ろから斬りかかろうか。それとも首だけを斬って、さらし首にしようか。

いやいや、お茶に毒でも入れておくのもいいかもなあ・・・。

三人称サイド

そんなことを考えているうちに輝はいつのまにか眠ってしまった。

第一訓「事の前の日には気をつける」（後書き）

これ打つのに2時間かかりました。

なれないことはするもんではありませんね。（笑）

さて、今日から夏休みということで宿題がかなり出ています!!

そこで宿題を先に終わらすため、約3週間休みにしようと思います。
ご迷惑をおかけしますがお許しください。

ちなみに次は自己紹介編です。

第二訓「自己紹介しているいろいろ想像するもの」(前書き)

バカテスト 【国語】

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1)得意な事でも失敗してしまうこと』
- 『(2)悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、

(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

黒川輝の答え

- 『(2) 沖田に首輪』

教師のコメント

いったい、沖田という人に何をされたのですか!?

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2)泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

第二訓「自己紹介しているいろいろ想像するもの」

輝サイド

「・・では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします。」

ん？いつの間にか先生が来ていたようだ。
しかも、自己紹介が始まるなんて・・・
めんどくせエな。まあ、無難に終わらすか。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

なんか、歴史もののドラマに出てきそうな独特の言葉遣いだな。
小柄な体に、肩にかかる程度の長さの髪をゆったりとしばつたいで
たち。

まるで女子のようだ。
こんな姿だといろいろ大変だろうな。

「・・と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

軽やかに微笑みを作って自己紹介を終える木下に対しての男子の視線がさつきからおかしい。
危ないだろこのクラス！！

しかし、こいつどこかで会ったような・・・？

「・・・・・・・・土屋康太」

そんなことを考えているといつの間にか次の生徒になっていた。
なんか暗いイメージだな。
友達とか少ないのかな。

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話ができるけど読み書きが苦手です」

ふむ。次は女子か。見渡す限り男子しかいないから、荒れ地に咲く一輪のバラといったところか。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったの。」

育ちはドイツなんてすごいな。見た目もなかなかいいしもてるだろうな。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

前言撤回！！それにこれは猛毒を持ったバラだ！！

「はろはろー」

そいつが笑顔で手を振っているほうを見ると・・・

「・・・あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

吉井と呼ばれた男は、ものすごく怯えた顔をしていた。
しいていうなら、島田はお妙さん、吉井は銀さんといったところだろうか。

島田の自己紹介が終わり、その後は自分の名前を告げるだけの作業が進んだ。

ちょうど俺が眠りかけていたところ、先ほど島田にいじられていた吉井の番になった。

「・コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね♪」

どこのどいつが『ダーリン』なんて呼ぶんだよ。

『ダーリーリーーン!!』

・・・このクラスにいた。しかもほぼ全員だし。

木下のことといいこのクラスはものすごく危険だと思う。

「・失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します。」

コイツ、作り笑いでごまかしているな。

その気持ち、俺にもわかるぞ。

しかしFクラス、恐るべし・・・

そんな気持ちとは無関係に自己紹介は進んだ。

自分の番までまだ時間があったので、俺が寝ようとしたその時だった。

ガラリ

女子生徒が入ってきた。

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」
『えっ?』

教室全体から驚きの声上がる。

理由が全くわからない俺はその代わりにあくびをした。

「ちょうどよかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい!あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

肌は白くて、背中まで届く柔らかそうな髪。その姿はまるで聖母のようだった。

「はいっ!質問です!」

突然、男子生徒の一人が高々と右手を挙げた。

「あ、は、はい。なんですか?」

そりゃあ、驚くな普通。登校してきていきなり質問だし。

「なんでここにいますか?」

・・・おい。どんだけ失礼な質問なんだよ。相手の気持ちを考えろよな。

でも、なんかみんな聞きたそうだな。なんで?
アレ?もしかして俺だけ話についていけないノリ?

「そ、その・・・。振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまし

て・・・」

『ああ、なるほど』

試験途中での退席は0点扱いになる。

姫路は高熱のため試験を最後まで受けられず、結果としてFクラスになってしまったというワケだ。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故にあつたと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

いったいどこからそんなバカな言い訳が出てくるんだ！？

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

そんな中、姫路は逃げるように空いている卓袱台についた。
さて、俺は寝るとするか！！

- 数分後 -

「-くん。黒川くん。起きてください」

ハッとして、目をこすりながら俺は顔を上げた。

「次は君の番ですよ」

どうやらいつの間にか俺の番になっていたらしい。

みんな俺の方を見てるし。

俺はめんどくさいが立ちあがり、自己紹介を始めた。

「えー黒川輝です。かなりのめんどくさがり屋です。とりあえず俺のことは輝とでも呼んでください」

秀吉サイド

「-とりあえず俺のことは輝とでも呼んでください」

かなりかつたるそうじゃのう。

それに、見た目からして全くやる気が感じられない奴じゃ。
目はまるで死んだ魚のような目。

顔は整っておるのにもつたいないのう。

輝は自己紹介を終えると座って、窓の外を見始めおった。
あやつ、クラスで浮くじゃろうのう。

「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」
「了解」

ふむ。最後は雄二かのう。

輝サイド

坂本と呼ばれた男はゆっくりと教壇に歩み寄った。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

坂本は鷹揚にうなずいた。

まあ、あくまでもFクラスだから自慢にもならないと思うんだが。
しかし、坂本は自信に満ちた表情で教壇に上がり、俺らのほうに向
きなおった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好き

なように呼んでくれ」

んじゃ、坂本のままでもいいや。

「さて皆に一つ聞きたい」

雄二はゆつくりと、全員の目を見るように告げる。

コイツ人の扱いがうまいなあと思つた。

雄二は皆の様子を確認した後、教室の各所に視線を移す。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

ハッ！？つられて俺も視線を追いかけてしまった・・・。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

一呼吸おいて静かに告げた。

「不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!』

地の底から聞こえてくるような魂の叫び。
そしてその後、次々と不満の声が上がった。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

坂本は自信にあふれた顔に不敵な笑みを浮かべた。

「これは代表としての提案だが」

なんかいやな予感が・・・

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う。」

・・・めんどくせエことになったな。

第二訓「自己紹介している想像するもの」(後書き)

お久しぶりです。

三週間の休みの結果、宿題は………終わりませんでした。

どうもすみません!!orz

一応頑張りましたがダメでした。

まあ、それでも更新はするつもりです。

多分、文の量は少なくなりますが、そこは勘弁してください。
ちなみに休みの間に、3・5巻までの内容が決まりました。(何してんだ俺!)

銀さんが出てくるのはまだ先になりそうです。

第三訓「バカな奴らは意外と扱いやすい」(前書き)

バカテスト 【英語】

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

黒川輝の答え

「母国語もしつかりできていないのに他国の言語を勉強してどうするんですか？」

教師のコメント

意見を述べず、せめて訳してください。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 ● ? ♪ ☆ × 」

教師のコメント
できれば地球上の言語で。

第三訓「バカな奴らは意外と扱いやすい」

輝サイド

坂本がAクラスへの宣戦布告を提案した後、教室内から悲鳴の聲が上がった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

確かにFクラスがAクラスと戦うのはあまりにも無謀すぎる。結果は目に見えている。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

坂本はあえてそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

最初から無理なんて言っていたら勝てるわけがない。

俺も隊士達からそういった考えを捨てさせるのは苦勞する。

さて、坂本。お前ならこの状況どうするのか。

「根拠ならあるさ。このクラスには試召喚戦争に勝つことのできる要素がそろっている」

クラスの皆がさらにざわめく。

「それを今から説明してやる」

坂本はまるで沖田さんのような笑みを浮かべて壇上から俺らを見下ろした。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを除いていないで前に来い」

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になりながら否定のポーズをとる土屋。

・・・人前であそこまでできる奴をさすがの俺でも見たことはなかった。

さすがの近藤さんでも隠れているぞ。

「土屋康太。こいつがあムツリーニの有名な寡黙なる性識者だ」

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

こいつがあムツリーニだったのか！！

この学校の裏で販売されているという女子生徒たちの写真。それを取っているのはムツリーニと呼ばれる人物だった。

普通ならば盗撮の罪で捕まえているところだ。

だがここは学園。

俺もそこは大目に見ている。（っていうか、実は何となく興味が・・・）

でも本当は重罪だからな！！

よい子はまねをしないでください！！

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「すいませーん。俺、何も知りませんけど。」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

「そんなにすごいのか？」

「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった」

「彼女なら、Aクラスに引けをとらない」

「ああ。彼女さえいれば何もいらない」

なるほど。学力はAクラスレベルなのか。それはすごいな。
あと、何どさくさにまぎれてラブコールを送っているんだ！？

「木下秀吉だっている」

「ん？こいつも賢いのか？」

「おお・・・！！」

「おお。アイツ確か、木下優子の弟じゃ・・・」

結局、木下優子の弟ということしかわからなかった。
なにがすごいんだろうか。

「さらに、『歴史の精通者』の黒川輝もいる」

不意に自分の名前を呼ばれて、顔を上げた。

『何！？HMだと！？』

『なんでHMがこのクラスに！？』

ハイハイ。名前を書き忘れたからですよ。（基本は沖田さんのせい
だけだ）

HMというあだ名は俺が一年の時につけられたものだ。
常に歴史においては満点だったから、いつの間にかそう呼ばれるよ
うになった。

まあ、歴史しか自慢できるものはないけど。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だっ
たのか』

『実力はAクラスレベルが三人もいるってことだよな！』

残念。俺の実力はBクラスレベルだし、これに参加する気が無い。
いや、もしかして木下のことか？

そうだとすると、俺はいつたいどれだけ自意識過剰なんだアー！？
そんなことはお構いなしに、クラスの士気は上がっていった。

冷静に考えてみるとAクラスレベルが二人いたとしてもAクラスを
倒すことは難しいと思うんだが。

だが、坂本は代表としては向いているな。
もしかしたら奇跡が起こるかも……

「それに吉井明久だっている」

・ ・ ・ ・ シン -

一気にクラスの士気が下がった。

・ ・ ・ 少しでも期待した俺はバカだ。

第三訓「バカな奴らは意外と扱いやすい」(後書き)

二日連続での投稿はさすがに疲れました・・・。

でも、少しでも早く輝といろんな人たちをからませるため、この部分から抜け出したいんで。

次の話はまだラストが書いていないんで、明日投稿できるかわかりません。

第四訓「死んだ魚のような目をした奴にやる気はない」(前書き)

【質問コーナー】

新八(以下新) 「・・・銀さん。なんですかこれ？」

銀時(以下銀) 「何って、質問コーナーに決まってんじゃないか」

新 「そうですよね。ってなんで僕らが出てるんですか!？」

作者、僕ら出るのまだ先って言ってませんでしたか!？」

銀 「いやー、作者がバカテストの数学を作るのがめんどくさいって言ってるさ」

神楽(以下神) 「どうしたらいいか迷ったあげく私たちに出番を回したアル」

新 「作者テキトーだな。おい」

銀 「まあ、とりあえず始めようぜ。初回だから作者からの質問に答えるぞ」

新 「(作者からって必要無くな!?) わかりました」

神 「まかせるアル!!」

作者からの質問

「銀さんたちは早く出番がほしいですか？」

銀・神・新

「「「あたりまえじゃアアア――！！！！」」」

第四訓「死んだ魚のような目をした奴にやる気はない」

輝サイド

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まったくそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたこと無いぞ』

・・・なんか吉井がとてもかわいそうだ。

「ホラ！せつかく上がりかけていた士気に陰りが見えてるし！僕は雄二たちとは違つて

普通の人間なんだから、普通の扱いを……って、なんで僕をにらむの？

士気が下がったのは雄二のせいでしょう！」

「そつか知らないのなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ」

「・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

つい口を滑らしてしまった。

このことはさすがの俺でも知っている。

「ち、違つよ！ちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そつだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

まるでコントを見ているようだ。

《観察処分者》。学校生活を営む上で少し問題のある生徒に課せられる処分だ。

吉井がこれに該当していたのか。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路が首をかしげている。

きつと、こんなものとは縁が無かったんだろう。

「具体的には教師の雑用係だな。力時ごとかそついった類の雑用を、

特例としてモノに触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

まあ、本来は試験召喚獣は物に触ることができないからすごいんだが・・・

『おいおい。――《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると

本人も苦しいってことだろ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことだよな』

その通り、負担の何割かはフィードバックするから本人もかなりきついのだ。

あと、召喚しないヤツもここにいるぞ。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフオーする台詞を言うべきところだよな？」
「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すっごい大胆に無視された！」

・・・吉井を見ていると本当に慰めなくなってくる。

「皆、この境遇には大いに不満だろう？」

『当然だ！！』 ・・・別に

「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』 ・・・めんどくせエ

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』 ・・・どうでもいい

クラスの雰囲気は盛り上がってきているが、俺のやる気はそうならなかった。

とりあえず今は沖田さんをやることしか考えられなかったのだ。

それに、興味がない。

あとで坂本に断りを入れておこう。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらう。無事大役を果たせ！」

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目にあうよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと
思っ行ってみる」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

力強く断言する雄二だったが怪しかった。

そう。何となく雰囲気……

「大丈夫俺を信じる。俺は友人を騙すような真似をしない」

本当かよ。おい。

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

多分「使者」じゃなく、「死者」を使っただ方が正しそうだ。

クラスメイトの歓声と拍手に送りだされ、吉井はDクラスに向かっ
た。

さて吉井が行つて^{殺されて}いる間に俺も一仕事終わらせようか。

「なあ、坂本」

雄二サイド

「なあ、坂本」

明久を上手くDクラスに向かわせた後、意外な人物が声をかけてき
た。

「ん？なんだ？」

「ここで話しくいから、廊下に出てくれないか？」

「別に構わんが」

俺は輝に続いて教室を出た。

「んで話つて？」

コイツから話しかけてくるなんて全く予想していなかった。
黒川輝といえば、学校内で一番の無口で有名だったのだ。
輝が口を開いた。

「すまないが、俺は試召喚戦争に出るつもりはない」

そうか。わかった。っておい！？

「ちよつ、ちよつと待てよ！！それはどういうことだ！？」

俺は驚いて聞き返した。

コイツがいないとAクラス戦はきついからだ。

「言っただろ。俺はかなりのめんどくさがり屋だと」

「いや、だからと言って・・・」

「大丈夫。俺抜きでもお前ならやれるさ」

そついうと輝は、背中を向けて手を振りながら階段のほうに向かった。

・・・マジかよ。

大幅に作戦変更じゃん。

俺は頭を抱えながら教室に戻った。

輝サイド

坂本に試召喚戦争への不参加を告げた後、俺はグラウンドの隅にある大きな木の下に来ていた。

ここは、俺が一年の時から来ている昼寝スポットだった。

ここで昼寝することは俺の日課なのだ。

今日はちよつと早いけど。

「ふあゝあ・・・」

俺は一つ大きくあくびをすると、木の幹に身を任せて目をつぶった。

第四訓「死んだ魚のような目をした奴にやる気はない」(後書き)

新たに質問コーナーを作ってみました。読者からに答えられる限り答えていこうと思います。でも、バカテスト優先なんでそこところよろしくお願いします。

さて、次からは物語が展開していきます。

舞台は、大江戸！！バカテストメンバーの一人が輝と大きくかわるようになります。

第五訓「運が悪い日はとことん悪い」(前書き)

バカテスト 【物理】

問 以下の文章の()に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であつて、()である。』

姫路瑞希・黒川輝の答え
『粒子』

教師のコメント
よくできました。

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もRPGは好きです。

第五訓「運が悪い日はとことん悪い」

Dクラス戦の日の夜、大江戸の中心街で一人の美少女（？）が帰り道を急いでいた。それはよく見ると秀吉だった。

秀吉サイド

ふうぅ……。すっかり遅くなってしまったわい。Dクラス戦の後、わしは演劇部で使う着物をここに買いに来たのじや。

大江戸では結構いい和風のものが安く手に入る、というウワサを聞いたからのう。

じやが、大江戸は帰り道とは逆の方向にあるからあまり来たことが無かったのじや。

じやから、道に迷ってしまってこんなに遅くなってしまったわけじや。

姉上に怒られるじやろうなあ……

そんなことを考えておると、いかにもチャラそうな三人の男が近づいてきおった。

「ねえ、そこのお嬢さん。俺たちと遊ばない？」

ニヤニヤしながら一人の男が話しかけてきおった。

「すまぬがわしは今、急いである。それにわしは男じや」
「聞いたかよ？『わし』だつてよ」

男たちはギャハハハと笑いだしおった。
むっとしたがわしは関わらない方がよいと思ってほっといて帰ろうとした。

「ちょっと待てよ!!」

一人が腕を掴んできおった!!

「は・・・離すのじゃ!!」

わしは手を振りほどこうとした。
じゃが、相手の力は強かった。

「いいじゃん、いいじゃん。夜はこれからなんだぜ？」
そ奴らは不気味に笑いだし始めおった。
わしはゾツとした。

「じゃ・・・じゃからわしは男なのじゃ!!」
「へえゝそんなにかわいいのに？」

そういうとお尻のあたりを触ってきおった。

だ・・・ダメじゃ。まるで通用しないのじゃ!!

「俺たちがイイコト教えてやるからさあ」

そういうと、強引にわしを引っ張っていこうとしおった。
わしは助けを求めて周りを見渡したのじゃが、みんな見て見ぬふりをしておった。

な・・・なぜ誰も助けてくれないのじゃ・・・

わしがもうダメじゃ、と思ったそのときじゃった。
後ろから声が聞こえた。

「お前ら！！そこで何をしている！！」

助かったと思ひ声のした方を見ると・・・

「あ・・・輝！？」

（時間は数分前に戻る）

輝サイド

か・・・体中が痛い・・・

それに、周りの人の視線も痛い・・・

まあ、服がところどころ破けていて焦げ跡がついていたら誰だって
不思議に思うか。

なんでこうなったかという・・・

・・・

放課後俺はすぐに家に帰り、駐屯所に向かった。

そして、真選組の服に着替えて沖田さんの部屋の前に行った。

もちろん、沖田さんをやるためだった。

俺は試行錯誤を重ねて、後ろから斬りかかることにした。

刀は持ったし、帰り血をふくためのティッシュも用意して、準備は

完ぺきだった。

（落ち着け！！落ち着くんだ俺！！）

俺は沖田さんの部屋の前で高まる気持ちを抑えていた。

どんな場面でも冷静さを失うことは命取りになるからだ。

そして俺は、心を落ち着かせて大きく一つ深呼吸をした。

（よし、いける！！いけるぞ俺！！）

俺は、刀に手をかけて・・・障子を開けた！！

「沖田さん！！かく『ドカーン！！』」

俺は数十メートル先の塀まで飛ばされた。

突然な事に全く理解できなかった。

周りは煙で充満していた。

「ケホッ、ケホッ・・・」

「俺を殺ろうなんて100年早いぜイ、輝」

部屋からバズーカを手にした沖田さんが出てきた。

くっ・・・なんではれたんだ！？何度もシミュレーションして完ぺきだったはずだ！！

「・・・障子にお前の影テメーが映っていて動きがばれちゃったぜイ」

俺のバカヤ口おおー！！何してんだ俺！？

っていうか沖田さん人の心勝手に読まないで！！

「なんで俺を殺ろうとしたんですかい？」

沖田さんは聞いてきた。

「それは・・・」

（事情説明中）

「・・・というわけです」

「そうですかい」

沖田さんは少し何かを考えていた。

もしかして俺に何かしてくれるのでは！？（いい意味で）
少しして、沖田さんは口を開いた。

「でも、Fクラスとやらに落ちたのはおれのせいじゃないでさア」
「ハイ？」

沖田さんのいった意味が分からなかった。

「よく考えてみるんでさア。それはすべて自分が悪いんじゃないで
すかい」

「いや。沖田さんのせいで集中できなかったんですけど」

「それじゃあ、輝。お前は解けなかった問題も俺のせいにするんで
すかい？」

「うつ・・・」

言われてみればそうだ。確かに集中力が欠けていたのは沖田さんの

せいだが、すべて沖田さんのせいではなかった。確かに分からなかった問題もたくさんあった。

それに、せめてEクラスには行けたはずだ。

「（ガクツ）orz」

「わかりやしたかい？それじゃあ、この罰はどうしやしようか？」

沖田さんはニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

や・・・ヤバイ！！どれくらいヤバイかというとマジでヤバイ。

「い・・・いや。ここは両方とも悪かったということ・・・」

「さっき自分が悪いことを認めやしたよね」

や・・・やられた・・・

「それじゃあ、俺らの見回り場所をよろしく頼みますぜ」

・・・

ああーもう！！最悪だ！！

この件は俺のせいなので、沖田さん率いる一番舞台の見回り場は俺一人がしている。

他の隊士たちは、いつも定められている見回り場所をやらせている。だから今この場で事件が起きると本当に危ない。

状況によつては対応しきれないからだ。

神様、何も起こらずに終わらせてください。

と思つて見回りをしていると・・・前方にナンパされているっ

ばい人発見。

最近こんなのばっかだ・・・
もしかして神様、俺を見放したのか!?

まあ、起こっているなら仕方がない。

それにこれぐらいなら大事にはならないだろう。
俺は意を決して少し遠目から叫んだ。

「お前ら!!そこで何をしている!!」

からまれていた奴が振り向くと何とそいつは・・・

「あ・・・輝!？」

木下だった。

・・・男がナンパされるなんて初めて見たぜ。

秀吉サイド

輝は見慣れない服を着て、腰に刀を身につけておった。
なんのコスプレかのう？

「ちっ・・・真選組か」

そういうと、わしを掴んでいた手を離して人ごみに紛れて逃げおつた。

輝が走ってきおった。

「大丈夫かい。キミ」

輝はまるで他人のように接してきたのじゃった。

「あ・・・ありがとうなのじゃ。輝」

「僕は輝なんて名前じゃないよ」

輝は笑顔で否定しおった。

「いや、どうみても輝じゃろ？」

確かに昼間と様子は違うが、目が死んでおるからのう。

「違うよ。ただの通行人Aだよ」

輝はまだ自分を隠そうとしおった。

「ただの通行人が声を掛けただけであやつらが逃げるわけ無からう」

じゃが、なんで輝は隠そうとするのじゃ？

コスプレしてるのがばれたくないのかのう？

それに、真選組ってなんじゃ？

輝サイド

くっ・・・冷静なツツコミだ！！

俺は少し焦っていた。

なぜなら、俺が真選組であることはばれたくなかったからだ。

かつて、それで嫌な経験をした。

二度とあんなことにはなりたくなかった。

だから俺は、ねばる！！

「分かった。正直に言うよ。僕は真選組隊士、沖田総悟だ」

沖田さん。名前を借りるぜ。

「いや、じゃから輝じゃろ」

木下は引き下がらなかった。

「だから、僕は沖田総悟だ」
『ジー』

木下は俺のことをにらみだしやがった!!

「いや、だから僕は『ジー』」

「本当に僕は『ジー』」

「いや、ま『ジー』……ああもう!!そうだよ!!俺は輝だよ!!」

負けた……。一日に二回もだれかに負けるなんて……
コイツ、意外とにらむと怖いじゃねエか!!

「ところで、なんでお主はここにおるのじゃ?」

木下は首をかしげて俺に聞いてきた。

さっきの態度との差に一瞬、ドキッてきた。

ギャップ差攻撃なんて卑怯な!!

マジで危なかったぞ!!

「いや、何でって……見りゃ、わかるだろ?俺は真選組なんだよ」

この姿を見られた上に名前までばれた以上、隠し通すのはもう無駄だった。

はぁ、またアレに堪えないといけないのか・・・

「シンセングミってなんじゃ？」

・・・ハイ？

「おまつ・・・真選組を知らねエのか！？」

「シンセングミって江戸時代のか？」

バカだ俺！！真選組のこと言わなくてよかったじゃねエか！！orz

「輝、どうしたのじゃ！？」

ほっといてくれ……。今日はもう早く帰って寝たい・・・

第五訓「運が悪い日はとことん悪い」（後書き）

ものすごく長くなってしまいました。テストが近いのに!!
多分更新は1週間に1回のペースになっていきます。

お許しください。

次回は質問コーナーです。

質問待ってます!!

第六訓「灯台もと暗し」（前書き）

新「夏も終わっちゃいましたね、銀さん」

銀「・・・そうだな」

新「どうしたんですか？機嫌が悪そうですね」

銀「あつたりめエーだ！！たくなんで夏に仕事が入ってくんだよ！！」

「周りの奴らは休んでるって言うのに！！おかげで全く休めなかったじゃねエか！！」

新「いや、そう言いながらほとんど家で過ごしていたじゃないですか」

神「そうアル。ほとんど毎日ダラダラしていたアル」

銀「・・・そんなわけで質問コーナー行ってみよう！！」

新「誤魔化したアー！？」

【質問コーナー】

銀「今日の質問はY井A久さんからだ」

新「そうですか（って作品内のキャラじゃね！？）」

神「（一通も質問が来なかったから急ぎよこの世界で募集したアル）」

作者「それを言わないでエー！ー！！」

銀「作者は無視して、え」と『僕は毎日水と塩で生活しています。友達にそのことを言うと言みの目で見られます。これはおかしいことですか？』だそうだ」

新「いや、絶対おかしいでしょ！？よく生きていられますね！？」

神「大丈夫アル。ここに糖分だけで生きている奴が一人いるアル。

新「・・・言われてみればそうだね、神楽ちゃん」

銀「おい！！こんな奴と一緒にするな！！人間糖分取ってりやあ生きていられるんだよ！！よく考えてみる！！脳のエネルギー源は・・・」

作者・新・神

「「読者の皆様の質問お待ちしております」」

銀「おいー！？勝手に終わらすじゃねエー！！つーか何作者混じってんだよ！？」

第六訓「灯台もと暗し」

輝サイド

俺は今、木下を家まで送っている。

本人は「大丈夫じゃー！」って言っていたけど、残念ながら木下の容姿じゃ危険だ。

ところで今日のDクラス戦はどうなったのだろうか。

「なあ、木下」

「なんじゃ？」

「今日のDクラス戦はどうなったんだ？」

「そっぴゃ、輝は参加しておらんかったのう」

「ああ」

沖田さんに負けるぐらいなら参加しときゃよかったな。
めんどくせエけど。

「もちろんわしらが勝ったぞい」

「そっぴゃつぱり勝ったーって、ええ！？」

俺は驚いて木下のほうを見た。

「どっぴゃどうしたのじゃ、輝！？」

「そっぴゃそりゃあ、だってっぴゃ」

正直に言う俺は負けと思っていた。

たとえ、姫路がいようとFクラスと他のクラスの学力の差は明らかだったからだ。

それが俺が試召喚戦争に参加しなかった理由でもある。
負け戦に参加する気はないからだ。

あまりのことが無い限り。

しかし、まさかほんとに勝つとは・・・

「・・・もしかして輝。お主、負けると思っておったんじゃ・・・」
「まさか！！絶対に勝つと思っていたよ！！ハハハ・・・」

俺は笑って誤魔化した。

しかし、木下は一言こう言った。

「・・・凶星じゃぞ、輝」

一瞬で見抜かれた。

なんでわかつたんだ！？

「あたりまえじゃ！！演劇部に所属しておるわしの目をごまかそうとしても無駄なのじゃ！！」

そうだった・・・。確かそんなことを言っていたな。

それならこんな素人の演技は見破られるか。

っていうかまた心を読まれた！？

「輝は思っておることが顔に出るからのう」

そうだったのか・・・。

よく今まで真選組にいれたな。

「ところで輝。なんで今日のDクラスせ「いやー、しかし今日はほんとに大変だったな！！」・・・」

木下はきつと俺がDクラス戦にいなかった理由を聞きたかったのだ

ろう。

だが、きつとうすうす気づいているはずだ。

真選組のせいだということを。

真選組のことを知らなくても。

知らなかったら、知らなくていい。

というか絶対に知ってほしくない。

俺が

真選組だということを^{人殺し}

秀吉サイド

あのあとから輝はずっと暗い顔をしておった。

そのせいでわしは声がかかれなくなり、沈黙が続いておった。
いったい何を考えておるのじゃろうか。

わしは夜空を見上げた。

いつの間にか曇っていたようで、星や月は全く見られずにただ闇だけが広がっておった。

輝サイド

- なあ、あいつ人殺しらしいぜ。

- うわ、こっちょんじゃねえよこの人殺しが!!

- なんで人殺しがこの学校にいるのよ!!

・・・また嫌な事を思い出してしまった。

中学の時、真選組に入っていることがばれて俺は言葉の暴力にあっていた。

やつらは真選組のことを人殺し集団だと思っていたのだ。

しかし、それは特別な時だけであって、基本的には大江戸とその周辺の治安の維持が仕事だったのだ。

だが、そのことはあまり知られていなかった。

一つは、真選組が結成されてからまだそれほどたっていないかったから。

もう一つは、普段の行いだ。

いつもとは言わないが、時々物事を過度にやっつけてしまい問題を起こすことがあったのだ。

まあ、警察が問題を起こしてどうするといったところだ。

さらに、唯一刀の所持が認められていたため、人殺しという発想につながったようだ。

しかし、真選組のおかげで大事に至らなかったこともたくさんあるのだ。

それなのに世間は悪いところばかり誇張する。

マスコミもマスコミで無かったことまで付け加えて報道していたりする。

全く、この国も腐ったものだ。

「輝、あれがわしの家じゃ」

そんなことを考えていると、ふと木下の声が聞こえた。

どうやらいつの間にか、木下の家についていたようだ。

木下の指差した方を見ると・・・

「俺の家の隣イイーーー!？」

夜空に俺の声が響き渡った。

秀吉サイド

「隣の家は輝の家なのか!？」

「あ・・・ああ」

今まで全く気付かなかったのじゃ。

2年ほど前に誰かが引越してきておったのは知っていたのじゃが、ほとんど電気がついておらず本当に人が住んでおるのかすらわからなかったのじゃ。

いったい普段何をしておるのじゃろうか。

わしは輝に聞いてみようと思ったが、他人の家のことを聞くのは悪いと思いやめた。

「まあとりあえず、俺は帰るわ」

輝は背を向けて立ち去ろうとしていた。

帰るっていつでも家は隣じゃし・・・そうじゃ!!

「輝、せっかくじゃしわしの家に来ないかのう。今日のお礼もした
いし」

「そんなのいいよ、別に」

「いや、どうしてもお礼をしたいのじゃ!!」

あの時、輝が助けてくれなかったら今頃わしは大変なことになっていたと思う。

輝には本当に感謝していたのじゃ。

輝サイド

木下は真剣な眼をしていた。

どうしてもお礼がしたいらしい。

しかし、見回りもあるし・・・

まあ、本当は沖田さんの場所だし・・・さぼっちゃえ

サイドアウト

（駐屯所）

「ん？」

「どうしたんですか、沖田隊長？」

「いや、一瞬誰かを調教しねエといけねエような気がしたんでさア

（ニヤリ）」

「そ・・・そうですか（怖っ！！）」

輝サイド

「ただいまなのじゃ」

俺は木下について木下家に入って行った。

「おじゃまし『バタバタバタ・・・！！』」「秀吉！！こんな遅くま

でど・・・こ・・・に」・・・」

あれ、俺の今日の前にいるのは何？

俺の目がおかしくなかったら・・・

まぎれもなく下着姿の女子だよね？

「キ・・・キヤアアーーーーーッ!？」

次の瞬間俺の意識は飛んだ。

第六訓「灯台もと暗し」（後書き）

・・・この作品の投稿中に停電になって、一時間の努力が無駄になりました・・・。

ものすごく疲れました。

さて次回も木下編（？）は続きます。

輝は実は過去にある人物とかかわっていました・・・。

第七訓「街中で出会った人に2回も会つともはや運命」(前書き)

今回はお休みです。

第七訓「街中で出会った人に2回も会つともはや運命」

輝サイド

・・・頭がズキズキする。

あの後俺どうなったんだろ。

「・・・・・・・・ら・・・・・・・・れ・・・・・・・・てい・・・・・・・・!!」

「・・・・・・・・な・・・・・・・・て・・・・・・・・た・・・・・・・・じゃ!!」

なんか周りが騒がしいな。

何をもめてるんだ?

俺が目を開けて体を起こすと、木下・・・とジャージ姿の木下がもう一人いた。

ああ、どうやら俺は幻覚を見るようになったらしい。

「あつ!!気づいたのか!？」

片方の木下が声をかけてきた。

多分こっちの木下は本物のようだ。

制服だし。

「ああ」

「頭は大丈夫かのう? 姉上が辞書を投げたんじゃが」

「一応大丈夫なはずなんだが、見たこともないのにジャージ姿の前の幻覚を見ている」

「だれが幻覚よ!!」

ジャージ姿の木下は突っかかるような勢いだった。

「・・・輝。あれがわしの姉上じゃ」

「顔が似てる・・・ってことは、お前双子だったのか？」

「そうじゃ」

でも木下よりなんかきつい感じがするな。

何より機嫌が悪そうだ。

まあ、確かに下着姿を見られ・・・ってそうだ！！下着姿を俺は見
たんだっ！！

すっかり忘れてた！！

ヤバイでしょう！！土方さんに怒られる！！

っていうかこれから俺は痴漢として人生を過ごすのか！？

それは絶対にごめんだ！！

と・・・とりあえず許してもらわなくては！！

「どうもすみませんでしたー！！orz」

俺は木下姉に全力で謝った。

優子サイド

「な・・・何よ！？」

あまりの突然な事にアタシは驚いてしまった。

それに目の前で土下座されているわけだし・・・

「真選組隊士として恥ずかしい！！あまりにも突然な出来事だった
とはいえ、つい見入ってしまったのは・・・って腕がもげるほどに
いたいっ！！」

最初、彼を許そうかと思ったがアタシは途中の部分を聞いて得意の関節技を決めた。

多分誰でもそうすると思うけど。

「……ところで名前はなんていうの？」

「そ……その前に手を離してくださいいいつつつ……！」

アタシは渋々手を離れた。

「ううっ……腕が……」などと言っているがアタシは無視した。どう考えても彼が悪いじゃないの……！！

「それで名前は？」

「あ……ああ」

彼はアタシのほうを向いた。

なんだか懐かしい感じがするのは気のせいかしら。

「俺の名は……黒川輝だ」

「！？」

一瞬、周りの時間がとまったように思えた。

アタシは彼を知っている……

彼は昔、アタシを助けてくれた人だ……

そして何より・・・

アタシの初恋の人・・・

輝サイド

なんだあの関節技は!?

あまりにも切れが良すぎるぞ!?

あれ以上力加わると間違いない俺は刀が持てなくなってたぞ!!

ところで、なんでコイツ顔がさつきより赤くなってんだ?

ま・・・まさか、余計に怒った!?

「ね・・・ねえ」

「は・・・はい!？」

緊張して声が上がってしまった。

何を言われるのだろうか。

はっ!!もしかして裁判所に訴えるということでは!?

終わった・・・

神様。今会いにゆきます・・・

「・・・あなたはアタシのこと覚えていないの？」
「へっ!？」

予想外のことで、つい聞き返してしまった。
覚えている? いったい何を?
こいつに会ったことなんてあったっけ?

「ほら、3年程前にアタシを2人組の男から・・・」

3年前? 木下似の女子?・・・思い出した!!

「ああ!! 確かにそんなことがあったなあ」

だから木下を見たときにどこかで会った気がしたのか。

サイドアウト

【3年前】

その日、優子は塾へ行く道を急いでいた。
学校から帰って少し昼寝をするはずがいつのまにか長く寝てしまったのである。

（秀吉ったらなんで起こしてくれないのよ!! 帰ったら覚えてなさいよ!!）

塾まであともう少しというところで事件は起こった。
優子が角を曲がったところで2人組の不良にぶつかってしまったのである。

「きゃっ!!」

優子は尻もちをついた。と同時に何かが落ちた音がした。

「ってーな!!」

ぶつかった不良は優子をギロツとにらんだ。
見た目からしてどうやら高校生のようだった。

「す・・・すみません!!」

優子は慌てて立ちあがり謝った。

「すいませんですむ問題じゃねえーんだよ!! 見ろよ!! 服が汚れちまったじゃねえか!!」

見ると服がジューズで汚れていた。
どうやらさっきの音は缶ジューズを落とした音だったらしい。

「おいおい、どうしてくれんだよ!! この服ブランドなんだぜ? 弁償してくれんのかよ!？」

「いえ・・・あの・・・その・・・」

優子は焦っていた。

塾に遅れることもあったが何よりもどうしたらいいのかわからなかったのである。

「おい。コイツ意外とかわいいじゃんか」

すると突然もう一人の不良が顔を覗き込んできた。

「・・・確かにそうだな」

さっきまで怒っていた不良もそう思ったらしかった。

そしてしばらく考えたあと何かを思ったらしく不気味に笑った。

「それじゃあ弁償はいいから今日一日、俺らと一緒に遊んでもらおうか」

そういうと不良は腕を掴んできた。

「ちよっ・・・ちよっと離しなさいよ!!」

優子は手を振りほどこうとした。

「へえ、なら今からお前の親と話でもしようか？」

「そ・・・それは・・・」

「なら、黙ってついて来い!!」

「は・・・はなしてよ!!」

周りにいる人はその様子を見ながらも黙って通りすぎていた。

自分が巻きこかれたくなかったからだ。

優子は泣きそうになっていた。

いくらあのバイオレンスな性格でもやはり女の子だ。

（だ・・・誰か助けて・・・）

優子は一生懸命涙をこらえていた。

その時だった。

「おい。お前^{テメー}らソイツを離せ」

優子の目の前に男の子が一人立っていた。

第七訓「街中で出会った人に2回も会うともはや運命」(後書き)

完結させるつもりが時間の都合上無理でした。

ごめんなさい・・・。

しかも文が下手ですね。

これから頑張って直していきたいです・・・

優子は輝のことが好きという設定にしました。

あと銀魂キャラとバカテスキャラのカップルを成立させようと思っ
ているんですけど・・・

何か案があったら教えてくれると嬉しいです。

第八訓「終わりよければすべてよし!」(前書き)

前回の続きをどうぞ!!

第八訓「終わりよければすべてよし!」

優子は助かったと思ってが、男の子を見て違う恐怖を感じた。

その男の子は目が血走っていて、体中から怒りのオーラがにじみ出ていたからだ。

「はあ？お前誰だよ」

「ただの通りすがりのもんだ」

「んじゃあ、関係ねえだろうが!」

「・・・お前らのことを一部始終見てた」

「だつたらなんだよ!!」

「俺も関係あるということだ」

その男の子ははっきりと言い放った。

「確かにぶつかったのはそいつが悪い」

男の子は優子を指した。

優子はビクッと体を震わせた。

「しかし」

男の子は続けた。

「しかしそれ以上に悪いのはお前らの態度だ」

男の子は不良たちをギロツとにらんだ。

「まず女の子一人に責任を取らせようとした時点でおかしい。それ

に普通これぐらいのこと　は許すのが当たり前だ。なのに^{デメー}お前らはその安い服をブランドだと偽って大金を払わせ　ようとした。さらには体で償わせようとした。これは明らかに^{デメー}お前らが悪い」

「この服のどこが安いって言うんだよ!!」

「^{デメー}お前バカか？あそこのユニ○口普通に売ってんじゃねエか」

男の子の指差した方を見て見ると・・・店の前にその服が飾られていた。

「っ・・・！！！！／／」

不良は顔を真っ赤にした。
周りからクスクスと笑い声が聞こえる。

「てめえっ！！いいかげんにしやがれ！！」

それにキレた不良の一人が男の子に殴りかかってきた。

だが、男の子はそれを軽々とよけると背後に回り込み後頭部を軽くたたいた。

すると不良は地面に倒れこんだ。

「！？てめえ、よくも!!」

もう一人も殴りかかったが・・・前の不良と同じ目に会っていた。
その時間わずか数十秒。

優子は目の前の光景が信じられなかった。

「ふう・・・大丈夫か？」

そついうと男の子はクルッと向きを変えて優子のほうを向いた。

最初とはまるで違い、今は優しい感じが漂っていた。
もちろん目も普通だった。

「あ・・・ありがとう」

優子は目をこすって答えた。

「今度から角を曲がる時は気をつけるよな」

男の子はニツと笑った。

優子はドキツとした。

その笑顔があまりにも魅力的だったからだ。

「それじゃあ、俺は急いでいるから」

そついうと男の子は走り去ろうとした。

「待つて!! 名前は？」

無意識のうちに優子の口は動いていた。

「俺の名前？」

男の子は優子のほうを見てさっきと同じ笑顔で答えた。

「俺の名は黒川輝だ」

.....

優子サイド

彼に会えたのはとてもうれしかった。

でも、目の前の彼には昔のような面影が全くなかった。

目はあの時と違い死んでいて、全体からやる気のないオーラが出ていたのだ。

もっとしっかりとした感じだったのに・・・

本当に昔、アタシを助けてくれた人が疑ってしまう。

「なんじゃ姉上。輝と知り合いなのか」

突然秀吉がアタシに聞いてきた。

「え・・・ええ。むかし、ちょっとね」

といつても向こうは私が言うまで分からなかったみたいだけど・・・

輝サイド

まさか二人とも助けたことがあるとは。
ある意味奇跡だな。

「ところで輝、夕食は食べたのかのう？」

木下が俺に聞いてきた。

「ああ、俺はもう食べたから大丈『グウ』・・・ぶ・・・」

なんでこのタイミングでお腹がなるんだあゝ!?

本当のことを言うと今日は夕食抜きで見回りを行っている。

沖田さんの場所を一人でしないといけなかったなのであの後すぐに出てきたのだ。

「お腹がなっておるでないか」

と木下に笑われた。

一方の木下姉は・・・笑いをこらえている。
は・・・恥ずかしすぎる・・・

俺は顔が熱くなるのを感じた。

「それじゃあ、さっきのお礼にわしらと夕食を食べんか？」

「しかし、それでは木下姉に悪くないか？」

「アタシはいいわよ」

あっさりと言われた。

「今から準備をするからそこで待つといてくれないかのう？」

「なら、アタシも手伝うわよ」

そういうと二人は台所の奥に消えた。

何気ないことだけでも、まるで家族のようなその心づかいがうれしかった。

俺は家族の温かさなんてほとんど感じたことがない。

両親はともに仕事の関係でもう4年も会っていない。

小学校のときだって年に数回しか会うことはなくいつも一人だった。

家に自分以外の人がいるってこんなにも違うのか。
俺はうれしかった

でも、だからこそ言わなければならなかった。
自分の身のことを。

もう二度と、あの時のようにこんなあたたかい家庭を壊すのはごめんだから。

「輝ー、できたのじゃー!!」

顔を上げると木下が俺を呼んでいた。

「・・・ああ、わかった」

俺は少し乱れた服を直して木下たちのいる部屋に向かった。

机の上に並べられた料理はどれもおいしそうに見えた。
どうやら今日は和食のようだ。

「輝の席はこっちじゃ」

木下は空いている席を指差した。

「・・・実はお前らに言っておかなければならないことがある」
「なんじゃ?」「なに?」

二人はほぼ同時に聞き返してきた。
さすがは双子。

俺は重い口を開いた。

「木下姉、真選組って知ってるか？」

「え・・・ええ、少しは」

「そうか。なら木下に説明してやってくれ」

（説明中） （第六訓参照）

「そうじゃったのか・・・」

どうやら真選組の事を知ってくれたようだ。
どこまでかは分からないけれど。

「だから俺にあまりかわらないでくれ」

「？どうしてなのじゃ？」 「その通りよ」

「当たり前だろ！！」

木下たちはビクツと体を震わせた。

つい大きな声で叫んでしまった。

失敗したと思ったが、俺はそのまま話を続けた。

「真選組っていうのは、みんな必ず誰かを斬ったことがあるんだ。
だからもちろん・・・俺も何人が斬っている」

俺は二人の顔が見たたくなく顔を下に向けた。

その時、視界に刀が入った。

昔は重く感じられたが、今では軽いと感じてしまう。

「俺はただの人殺しと変わりが無いんだ。一緒にいるとお前らに迷惑がかかる。だから俺は・・・みんなと一緒にいてはならないんだ」

俺は刃物そのものでしかない。

近づくものを誰でも不幸のどん底に落としてしまっただから真選組に入ってから誰も近づけてこなかった。

「黒川君はただの人殺しじゃないわ!!」

「そうなのじゃ!!」

「!?!」

今まで黙っていた二人が突然声を張り上げていった。

俺は驚いて、顔を上げた。

「黒川君は確かに人を斬ってきたかもしれない。でもそれは私たち一般人を守るためでしょ?それにアタシを助けてくれたじゃないの」
「姉上!?!わしもじゃぞ!!」

・・・木下完全に無視されたな。

確かに木下姉の言うとおりかもしれない。
でも・・・

俺は反論しようとして口を開きかけた。
が、木下姉のほうが早かった。

「だからそんな悲しいこと言わないで。黒川君は・・・みんなとい
ていいのよ」

「その通りなのじゃ」

ここにいていい?

この俺が？

それはずっと俺がほしかった言葉だった。

誰からも非難され避け続けられた俺にとってはまるで神のような言葉だった。

「……!?」「……」

俺は頬に何かが伝う感じがした。
涙だった。

なんで俺は泣いているんだ？
決して悲しいからじゃない。
うれしいからだ。

だが、俺は急いで目をこすって涙を止めようとした。

止まれ、止まれ、止まれ……!!

だけど涙はいつこうに止まる気配が無かった。
むしろ、あふれてくるばかりだった。

さっきまでの決心までもが涙とともにあふれてくるようだった。

突然、温かい何かが自分を抱きしめてきた。

木下姉だった。

「・・・泣いていいのよ。泣きたいときには思いっきり泣いて」
「そうじゃぞ。輝」

木下は少し離れた所から温かい目で見ていた。

それを聞いて俺の力は抜けた。

泣くのはもう何年ぶりだろうか。

いつ最後に泣いたのかも覚えていない。

人の温かさを感じたの感じたのは何年ぶりだろうか。

忘れかけていたそれらを確かめるように、木下姉を抱きしめる俺の腕に加わる力が自然と強くなっていった。

（数分後）

「・・・もう大丈夫みたいね」

そついうと木下姉は俺を離してくれた。

「あ・・・ありがとな／＼」

今思うとものすごく恥ずかしい／＼

まさか女子に慰められるなんて・・・orz

「それじゃあ、夕食にでもしようかのう」

「そうね。黒川君も座って」

まるで何事もなかったように接してくれる二人。

そんな心づかいも俺にとっては幸せだった。

なんだか少しだけ心が軽くなったような気がした。

「輝って呼んでくれたらいいよ。木下姉」

「そ・・・そう。じゃあそうさせてもらっわ。アタシの事は優子でいいわよ／＼」

「わしは秀吉でいいぞい！！」

「わかったよ。秀吉、優子」

俺は久しぶりに笑った。

優子が顔を赤くしていたけど・・・なんで？

俺は窓の外を見た。

いつの間にか雲はどいてきれいな満月が空に浮かんでいた。
ただ、空自体にはまだ雲があったけど。

第八訓「終わりなければすべてよし!」(後書き)

なんか優子の性格が違う気が・・・
気にしないでおきましょう!!(汗)

やっと今回で木下編完結しました。
次回は弁当の話を含んでBクラス戦にしたいと思います。
さて、輝は参加するのでしょうか。

一万アクセス突破記念！！「光りあるところに影はできる」(前書き)

ついに一万アクセス突破しました！！

本当にありがとうございます！！

下手な文章なのに読んでくれている人がいてとてもうれしいです！！
これからもよろしくおねがいします。

その記念にちよつとした予告編を作りました。
それではどうぞ！！

「一万アクセス突破記念！！」「光りあるところに影はできる」

輝が木下家で夕食を食べていた時、大江戸のある港では・・・

ゴオオオッー

ゴオオオッー

エンジンやら機械の音で少しうるさい船の一室にとある4人が集まり何か話し合っていた。

「紅桜、真選組の件といいすべて失敗に終わり、戦力は激減しています」

帳簿を見ながらまげをした男はため息をついた。

「それは先輩の作戦が悪いからじゃないんすか？」

壁にもたれかかっていた女は男のほうを見て吐き捨てるように言った。

「・・・私の作戦にケチをつけるつもりですか？元はと言えば、あなたが邪魔ものを排除していればこんなことにはならなかったんですよ」

「う・・・うるさいっス！！大体、紅桜の時は先輩が止めなければあの小娘を片づけられたんスよ！！」

「何言ってるんですか。あれぐらいの年頃の娘はあと2・3年した

らいちばん輝く・・・」

「先輩のロリコンもたいがいにするっス!!」

「ロリコンじゃありません。フェミニストです」

「二人ともやめるでござる。反省会になってないでござる」

サングラスをかけた男が二人を制した。

どうやら反省会をしているようだ。

女はプイッと顔をそむけ、鬚男はため息をついてまた帳簿に目を戻した。

「・・・全く。せつかくの月が台無しじゃねエか」

窓辺に座っていた男は何の感情も込めずに言った。

その男は左目をけがしているようで包帯を巻いていた。

男は月を眺めながら言った。

「・・・ところで例の件はどうなった？」

「はい。すべて準備は整い、あとはタイミングを待つばかりです」
「そうか」

「？拙者は何も聞いてないでござるよ」

「アタシもっスよ!!」

「今からその件について説明する」

包帯を巻いた男はキセルを吸うとゆっくりと煙を吐き出した。

「俺たちが次に狙う場所は・・・」

月から目を放すと集まった者たちのほうを向き、顔に薄笑いを浮かべた。

「文月学園だ」

一万アクセス突破記念！！「光りあるところに影はできる」(後書き)

ついに銀魂でおなじみの彼らが動き出します。

彼らの目的は一体！？

そして文月学園の運命はいかに！？

第九訓「一秒後は何が起こるか分からない」

輝サイド

「ふう〜……………やつと昼休みか」

今日は、昨日のDクラス戦で消費した（俺は参加していないが）点数を補充するため、テスト漬けになっている。かなりダルい。

まあ、とりあえず昼食でもとりに行くか。早く昼寝がしたいし。

さて、今日のメニューは何にしようか。昨日は牛丼だったし……………今日は親子丼にしようかな？どんぶりつながりで。

「おい。輝」

そんなことを考えていると誰かの声が聞こえてきた。声のしたほうを見ると……………秀吉だった。

「ん？なんだ？」

「実は今からみんなで屋上にいって姫路の作ってくれた弁当を食べに行くんじゃないか……………」

輝も行かぬか？」

見ると姫路は手にバッグを抱えていた。ん〜昼寝をしたいんだが昨日の事もあるし……………断りにくい

な。

それにあんなに楽しい夕食は久しぶりだったし・・・

秀吉と優子には恩を感じていた。

それに土方さんや沖田さんにばれなかったから・・・本当に良かった。ここ重要！！

・・・話を戻そう。

「・・・アイツらはいいいのか？」

俺は教室を出てい行こうとする吉井たちを指差した。

秀吉が良くてもみんなが嫌では参加はできないからだ。

「もう許可は取っておるから大丈夫なのじゃ！！」

笑顔で言う秀吉。

なんか癒されるなー

「そうか、じゃあ一緒にさせてもらっよう」

しかし坂本はよく許してくれたな。

試召喚戦争に参加しないって言ったのに。

俺は秀吉と一緒に吉井たちの後を追いかけた。

・・・

「天気が良くて何よりじゃ」

「そうですねー」

雲一つないきれいな青空。そんな空が俺にはまぶしすぎるくらい輝いて見えた。

「あ、シートもあるんですよ」

姫路がバッグからシートを取り出す。

結構、用意周到なんだな。

みんなが楽しそうに準備を始めた。

周りを見渡す限りだれもない。

どうやら貸し切り状態のようだ。

「気持ちいいねー」

「……………（コクリ）」

「同感だな」

昼寝スポットに追加しておこう。

そして、俺たちはビニルシートに座った。

「あの、あんまり自信はないんですけど……………」

姫路が重箱の蓋を取った。

『おおっ！』

俺らは一斉に歓声を上げた。

弁当はとておいしそうに見えた。

よく一人でこれだけの量を用意できたものだ。

俺が料理したら……………きつと悲惨なことになるな。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に―」
「・・・・・・・・・・・・・・・・（ヒョイ）」

土屋がエビフライをつまみ取った。

「あつ、ずるいぞムツリーニっ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・（パク）」

バタン ガタガタガタガタ

土屋は顔から倒れ込み、小刻みに震えだした。

第九訓「一秒後は何が起こるか分からない」(後書き)

短くてすみません。

来週には完結できるようにします。

第十訓「やっぱり見た目より中身」(前書き)

バカテスト 【化学】

問 『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

黒川輝の答え

『 $BENZEMA_9$ 』

教師のコメント

最近彼は不調ですね。

土屋康太

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『 $B-E-N-Z-E-N$ 』

教師のコメント

あとで土屋君と黒川君と一緒に職員室に来るように。

第十訓「やっぱり見た目より中身」

輝サイド

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

男三人で顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!？」

姫路が配ろうとしていた割りばしを取り落とした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ムクリ）」

土屋が起き上がった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（グツ）」

「あ、お口に合いましたか？よかったですっ」

姫路は喜んでいるようだが・・・・・・・・

土屋の足はガクガク震えていた。

「良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路が笑顔で勧めてくる。

しかしあんなものを見た後で食べる気になれない。

(・・・・・・・・二人とも。あれをどう思う?)

吉井がものすごく小さな声で話しかけてきた。

(・・・・・・・・どう考えても演技には見えん)

(俺もそう思う)

あれが演技なら相当すごい役者だ。

海外の有名なところからオフアーが来るぞ。

(だよ。ヤバイよね)

(明久。おぬし、身体は頑丈か?)

(正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化しているから)

(吉井。お前一日何食何だ?)

(うーん・・・朝食は寝坊してほとんど食べていないから二食かな?)

(それなら大丈夫だ。昔の人は二食だったというし・・・・・・・・)

(輝。明久の主食は水と塩なのじゃ)

(失礼な!!きちんと砂糖だって食べているさ!!)

(・・・・よく生きていられるなお前)

必要最低限の栄養もとれていない気がするんだが・・・・・・・・

明久サイド

輝にも妙に優しい目で見られた・・・・・・・・

全く。水と塩と砂糖があれば人間は生きていけるのに!!
なんでわからないんだろう。

そんな会話をしていても表情は当然笑顔のままだ。
輝は………いつも通り？死んだ顔だけど。

（おい、吉井！！人を勝手に殺すな！！死んでいるのは目だけだ！！）

あつ、目は認めるんだね。

（冗談だよ。ところでどうする？）

（冗談とは思えなかったぞ！！ってか話を変えるな！！）

（ならここはわしに任せてもらおう）

（そんな、危ないよ！）

（無視！？）

今は輝にかまっている暇はない！！

これは僕にとって重要なことなんだ！！

（大丈夫じゃ。わしは存外丈夫な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのだ）

（すごすぎだろ。おい）

見かけによらずタフな内臓だ。

ジャガイモの芽って確か毒だったと思うけど。

（でも………）

（安心せい。わしの鉄の胃袋を信じて―）

外見は美少女でありながら、誰よりも男らしい台詞を言おうとしたところで、

「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

雄二登場

「あつ、雄二」

止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パク

ボタンーガシャガシャン、ガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

輝サイド

「さ、坂本！？ちょっと、どうしたの！？」

島田が坂本に駆け寄った。

「…………ヤバい。間違いなく毒物だ。」

「あ、足が……………つってな……………」

吉井と目で会話をし、現状を理解したらしい。

坂本は優しいウソをついた。

「あはは、ダッシュで階段を昇り降りしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

事情を知らない島田が不思議そうな顔をした。

君には少し静かにしててもらおうか。

「いや、水分不足や急な運動で足がつかうこともあるぞ。だから、鍛えていくからならないわけじゃないんだ」

「本当？」

「ああ、もちろん」

「ふん……」

どうやら納得してくれたようだ。よかった、よかった。

「ところで島田さん。その手についてるあたりさ」

吉井が島田に話しかけた。

変なこと言っんじゃないやねエぞ。

「ん？何？」

「さっきまで虫の死骸があったよ」

「ええっ！？早く言ってよ！」

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきたほうが良いよ」

「そうね。ちよつと行ってくる」

島田は席を立った。

俺は吉井と目を合わせた。

『よくやった！！吉井！』

『輝こそ、やるじゃん！』

吉井のおかげでリスクは低減された。

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

「全くだね」

「かわいそうなやつだな」

はっはっは、と男4人で笑う。

しかし俺たちは必死だった。

（明久、今度はお前が行け！）

（む、無理だよ！僕だったらきつと死んじゃう！）

（流石にわしもさっきの姿を見ては決意が鈍る………）

（あれを食ったら間違いなく走馬灯を見るな）

（雄二がいきなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）

（そうかのう？姫路は明久に食べてもらいたいそうじゃが）

（そんなことないよ！乙女心を分かっていないね）

（いや、わかっていないのはどちらかと言うとお前のことだと――）

（ええい、往生際が悪い！）

「あつ！姫路さん、アレはなんだ！？」

「えっ？なんですか？」

吉井が指した方向を姫路が見る。

そのすきに吉井は坂本の口の中に弁当を押し込んだ。

「ふう、これでよし」

「・・・・・・・・お主、存外鬼畜じゃな」
「・・・・・・・・坂本。死ぬなよ」

坂本は激しく震えていた。

「ごめん、僕の見間違いだったよ」
「あつ、そうだったんですか」

こんな簡単な嘘に引つ掛かるなんて・・・・・・・・
なんだかものすごく心配だ。

「お弁当美味しかったよ。御馳走さま」
「うむ。大変良い腕じゃ」
「なかなかだったよ」

坂本のおかげにより弁当は片付いた。
坂本。今君はあの空を気持ちよく飛んでいるのかな？

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」
「うん。特に雄二が『美味しい美味しい』って凄い勢いで」

坂本が何とかして首を振る。
まだ生きていたのか。凄い生命力だ。

「そういえば、美味しいと言えば駅前に新しい喫茶店がー」

ここで話題をそらそうとする吉井。
うん。いい選択だ。

これ以上この話題でいると大変なことになりそうだ。

「ああ、あの店じゃな。確かに評判が良いな」

「俺も聞いたことがあるぞ」

「え？そんなお店があるんですか？」

「うん。今度今日のお礼に雄二がおごってくれるってさ」

「てめ、勝手なこと言っつなつての」

どうやらうまくいったようだ。

どこにでもありそうなほのぼのとした時間が過ぎる。

「あ、そうでした」

姫路がポン、と手を打った。

「ん、どうしたの？」

吉井がたずねた。

「実はですねー」

「ごそごそと鞆の中を探る。」

「デザートもあるんです」

「ああっ！姫路さんアレはなんだ！？」

「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」

「そつだ吉井！このままではこいつの命がもたない！」

全力で吉井の作戦を止めにかかる。

さすがにここで死者を出すのはまずい。

（ありがとう輝！助かった！）

（当たり前だ！これは止めなきゃヤバいからな！）

（ところで、明久！俺を殺す気が！？）

（仕方が無いんだよ！こんな任務は雄二にしかできない！ここは任せたぜっ）

（馬鹿を言っな！そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできないのはでкин！）

（この意気地なしっ！）

（そっという問題か！？）

（輝の言うとおりだ！そこまで言うならお前にやらせてやる！）

（なっ！その構えは何！？僕をどうする気！？）

（拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後で存分に詰め込んでくれる！歯を食いしばれ！）

（いやぁー！殺人鬼ー！）

（二人とも落ち着け！）

あと少しで殴り合いが始まろうとしたその時だった。
秀吉がすつと立ち上がった。

（……………わしがいこう）

（秀吉！？無茶だよ死んじゃうよ！）

（俺の事は率先して犠牲にしたよな！？）

……………態度が変わりすぎだろ吉井。

見た目の問題か？

（大丈夫じゃ。わしの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろう）

確かに、ジャガイモの芽が大丈夫ならいけるかもしれない。

「どうかしましたか？」

「あ、いや！なんでもない！」

「あ、もしかして……………」

姫路が顔を曇らせた。

まずい！！ばれてしまったか！？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ」

そっちかい！！

確かに、容器に入っているデザートはヨーグルトと果物のミックス
みたいなやつで

箸では食べにくいと思うけど！

「取ってきますね」

そんな俺の心の叫びを無視し姫路は教室に戻って行った。

「では、この間に頂いておくとするかの」

その時ふと俺の心の何かが痛んだ。

秀吉に食べてもらっていいのか？

俺は試召喚戦争に参加しない身だ。

それなのにこいつに……………

秀吉が容器を手に取りろうとした。

「待て。秀吉」

俺は秀吉の手をつかんだ。

「俺が食う」

秀吉サイド

わしが姫路の作ったデザートを頂こうとした時、いきなり輝が止めたので驚いてしまったわい。

「……………輝、無理はしないでいいぞい」

正直わしも食べたくないが、この中で胃袋が強いのはわしぐらいじや。

それならわしが食べたほうが安全じゃと思っただんじや。

「大丈夫、無理はしていない。それに俺は今まで土方スペシャルとダークマター暗黒物質を食ったことがあるから大丈夫なはずだ」

土方スペシャル？ダークマター暗黒物質？
はて？どんなものじやろうか。

「輝、それってどんなものさ？」

たまらず明久が聞きおった。

「……………吉井。時には聞かないほうがいいものもあるぞ。簡単に言つとだな。もはや人間の食うものではない」

「……………ごめん、輝」

輝が顔を真っ青にしながら答えるのを見てどうやら明久も察したよ

うじゃった。

いったいどんなものなんじゃ！？

そんなことを考えておると、輝が容器を手に取りおった。

「・・・・・・・・・・では、頂きます」

「・・・・・・・・・・すまん。恩にきる」

「ごめん。ありがとう」

「悪いのう、輝」

わたたちは申し訳なさでうつむいた。

そんなわたたちに輝はフツと笑いを浮かべた。

「気にするな。俺が望んだことだ。だが、一つ約束してほしい。」

「「約束？」」「」

わたたちは顔を見合わせた。

「絶対にAクラスに・・・・・・・・勝てよ」

そういうと輝は口にデザートを一気に駆け込みおった。

「輝ー！！」

明久が叫びおった。

輝。おぬしの事は忘れん・・・・・・・・！！

「もぐもぐ。ん？別に何ともない気ガハッ！？」

一人の勇者の命の灯が消えた瞬間じゃった・・・・・・・・

「・・・・・・・・雄二」

「・・・・・・・・なんだ？」

「・・・・・・・・さつきは無理やり食べさせてゴメン」

「・・・・・・・・わかってもらえたならいい。それより」

雄二は少し間を開けおった。

「絶対勝つぞ・・・・・・・・！」

「うん、そうだね！」

「そうじゃな！」

わしは本当に食べなくってよかったと思ったのじゃった。
ありがとうなのじゃ、輝！

当の本人は白目で泡を吹いておった。

第十訓「やっぱり見た目より中身」(後書き)

やっと投稿することができました!!

本当に大変でした……

そっぴゃ、けいおんって映画化なんですね。
情報遅くてすみません。

第十一訓「学校が終わったらすぐに帰りましょう」（前書き）

新「久し振りの登場ですね」

銀「かなり間が空いたしな」

神「作者、だらけ過ぎアル!!」

作「……返す言葉ありません」

【質問コーナー】

銀「さあ、今日は匿名希望さんからの質問だアッ!!」

新「やけに今日はテンションが高いですね。」

神「本当アル。いつもと全然違うアル。本当に銀ちゃんアルか？」

銀「ったりめエーだ!!なんでこんなにかつていうとな、何と今日は試食して感想を言ってほしいそうなんだ!!」

パンツ!!（料理が出てくる）

新・神「おおっ!!」

銀「な?ウマそうだろ？」

新「本当ですね!!」

神「早速、頂くアル!!」

銀「ちよつと待て！！質問内容が先だ。えゝつと……」

『この前好きな人にお弁当を作つてあげたら「おいしい」と言つて食べてくれました。今度作る時はもつと美味しく作りたいので何かコメントしてもらえればうれしいです』

とのことだ！！いやゝ、恋する乙女つてやつだね」

新「そうですねゝ。この人の好きな人がうらやましいですね」

神「それはそうと早く食べるアル！！」

銀「あつ！！あそこでお通ちゃんが大量の酢昆布を安売りしているぞ！！」

新・神「どこ【です・アル】か！？」

銀「それじゃあ、まずこのからあげから頂きまゝーす【パク】」

新「あぁっ！！銀さんずるいですよ！！」

神「銀ちゃんの嘘つき！！」

銀「騙されるお前らが悪いんだよ！！うゝん……そうだな口に入れるとネチヨつとした感じがして、歯にこびりつくようないゝ【バタン】」

新・神「銀【さん・ちゃん】！？」

第十一訓「学校が終わったらずくに帰りましょう」

輝サイド

目を覚ますと見知らぬ天井が広がっていた。

……あの後俺はどうなったんだ？

俺はズキズキと痛むお腹を押さえながら体を起こした。

置いてあるのもから考えると、どうやら保健室のようだ。

だが、保険の先生はいないようだ。

そのことが分かると俺は再びベッドに倒れこみ、先ほどの事を考えだした。

――なぜ俺はあんなことを言っただんだ？

あいつらには関わらないと誓ったはずだった。

なぜなら、彼らを傷つけないため。

今までもそれでやってこれた。

それなのに……

俺は今まで苦勞して守り続けてきた何かにひびが入ったような気がした。

秀吉と優子に自分の事がばれたからだろうか。

それとも……

……？（曇天）

そんなことを考えていると突然携帯が鳴りだした。

やっぱりいいねD。ESは。

ところで、いったい誰からだろうか。

画面を確認すると・・・

「副長」

とでていた。

・・・マズいねこれは。

ピッ

「・・・もしもし」

『輝ア！！お前デメー今何時だと思っていやがる！！』

「え〜と・・・5時ですね」

今気づいたけど俺どんだけ寝てんだ？

『早く来やがれッ！！今日は罰として書類の整理を山ほどさせてやる！！』

「そんな！？憎いですよ土方さん！！」

『お前デメーが時間までに来ねエのが悪いんだろっが！！早く来ねエと署の掃除もさせるぞ！！』

掃除なんて絶対に嫌だァーッ！！

どんな汚れがあるのか分からないんだぞ！！あそこは！！

「わかりました！！」

そついうと俺は携帯を切り、教室に荷物を取りに向かった。

・・・

廊下を走っていると後ろから突然声をかけられた。

「こら！！そこ！！走るな！！」

謝ろうと後ろを振り向くと鉄人だった。

「なんだ。黒川おまえだったのか。もう体は大丈夫なのか？」

「はい」

ところで「なんだ」とはどういう意味なんだ？

「俺はてつきり吉井か坂本だと思ったんだが・・・」

いや、普通わかるだろ！！

髪の色が全然違うだろうがア！！

ん？心が読まれてるって？

・・・気にしたら負けなんだよ。

「・・・ところで誰が保健室まで運んでくれたんですか？」

「ああ、確か吉井と坂本だったな」

その後、あいつらが俺を運んでくれたのか。
明日お礼を言っておかないとな。
でも、上手に嘘をつけたのだろうか？

「それはそうとして、黒川。お前午後のテストを受けられていない
だろ？」

「あつ、確かにそうですね」

すっかり忘れてた。
でも今日は受けたくない！！
さらに遅くなったら土方さんに殺されるし…………

「今日は今から職員会議があるから、明日のテストが終わった後教室に残って受けてくれないか？」

「わかりました」

よかった。

土方さんに殺されなくてすむようだ。

「そついや、黒川。お前は試召喚戦争に参加していないような気がするんだが」

「（ギクツ！）き…………気のせいじゃないですか？」

「…………今間違いないヤバいつて顔をしただろ」

く……………！！

バレちまったか！！

「黒川。お前は参加する気はないのか？」
「全くないですね」

めんどくせェし、何より俺の誓いだから……

「……………そうか。試召喚戦争に参加しないってことは、お前その時間は空くってことだよな」

「ええ、まあ」

遠くのほうからカラスの声が聞こえてきた。

……………なんだか嫌な予感がする。

「それなら、空いたからその時間帯は補しゅ」全力で参加させてもらいます!!」……………」

なんて卑怯な!!

これが教師のやることか!!

生徒の意思を尊重しやがれこの肉体バカがあつ!!

「……………黒川。今、お前ものすごく失礼なことを考えていなかったか?」

「メッソウモゴザイマセン」

鉄人がものすごい威圧で俺をにらんできたため、つい片言になってしまった。

「……………まあ、いい。とりあえず明日授業が終わった後、教室に残っておいてくれ。」

そして、その後絶対に試召喚戦争に参加するんだぞ。もし、参加していなかったら……………どうなるか分かっているな?」

「い……………イエッサー!!」

．．．．．さっそく誓いが破られた。

「それじゃあ気をつけて帰れよ」

「．．．．．はい」

なんでもっと早く目覚めなかったんだろ．．．．．

俺はため息をつきながら鉄人と別れた後、急いで駐屯所に向かった。

．．．．．今度から学校は早く帰るようにしよう。

駐屯所に着いた後、土方さんから山ほどの書類の整理をさせられたのはまた別の話．．．．．

第十一訓「学校が終わったらずくに帰りましょう」（後書き）

やっと次回からBクラス戦に入ります！！

さあ、輝はどんな活躍をするのでしょうか？

携帯の音を「曇天」にしたのは作者がDOESが好きだからです
（笑）

新曲「ジャック・ナイフ」をよろしくお願いします。

第十二訓「クールが決していいいわけじゃない」(前書き)

最近バカテストを書くのが難しくなってきたので、原本の一章が終わることに書いていこうと思います。

質問コーナーはその章の間に一回にします。

勝手なことで本当に申し訳ありません。

第十二訓「クールが決していいいわけじゃない」

輝サイド

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

坂本が教壇に立ち、俺たちのほうを向いている。

と言っても俺は今から昨日の午後の分のテストを受けるんだが。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺^やる気は充分か？」

『おおーっ！』

一向に下がらないモチベーション。

むしろ上がり続けている。

まあ、Dクラスに勝ったからな。

しかし、俺のモチベーションはそれと反比例していた。

めんどくせエし、ダルい。

まず俺にメリットが無い。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。そのため、開戦直後の渡り廊下戦は絶対負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらう。野郎共、しっかり死んで来い！！」

「が、頑張ります」

この雰囲気についていけない姫路が一步前に出る。

「……………わかるぞ姫路。この雰囲気についていけるほうがすこ

い。

『うおおっ！』

姫路と一緒に戦えるからか、前線部隊の士気はすごいことになっている。

これが空回りしなければいいんだが。

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。

Bクラス戦開始の合図だ。

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

クラスのやつらは全力で駆け出して行った。

試召戦争とは上手く名付けたものだ。

まさに今のアイツらの姿は戦場に駆け出していく兵士そのものだった。

ただひたすら勝利を信じて。

敗北などは考えずただひたすらに。

たとえその先に絶望が待っていたとしてもだ。

その姿がかつての俺の姿と重なり、胸が締め付けられる思いがした。

クラスには俺と坂本だけが残った。

いつもの喧騒にあふれたクラスとは違い不気味なほど静かだった。

「なあ」

廊下のほうを向いていた坂本がこちらに向き直った。

「お前……やっぱり参加する気はないのか？」

そっぴい、まだ言ってなかったな。

参加するって。

いや、参加させられたと言ったほうが正しいかもな。

「……………参加するよ」

雄二サイド

「えっ、本当か！？」

おもわず聞き返してしまった。

数日前まで参加する気が全くなかったはずなんだが……………
いったいなぜだ？

「急にどうしたんだ？」

「いや、参加する気はなかったんだが……………」

輝は大きくため息をついた。

「鉄人に脅されてな」

「ああ、なるほどな」

鉄人に脅されたなら分かる。

まあ、こいつが自らやる気になってくれるわけないか。

どうせ、鉄人のことだから参加しなければ補修を受けさせるともいったんだろう。

全く、困った奴だ。

しかし、待てよ。

鉄人のおかげで輝が参加してくれるんだから感謝しておかないとな。日頃の恨みはあるが。

「だけど坂本。今日は参加できないぞ。昨日の弁当のおかげで昨日の午後のテストを今から受けなければならぬからな」
「……………そうだったな」

俺は何とか苦笑いをしながら答えた。

二度とあんなことはごめんだ。

あれは人間の食えるものではない。

いや、全生物が食えるものではないな。

「とりあえず、俺は今からテストを受ける。まあ、がんばってくれ」

テストの準備をしながら輝はさりりといった。

……………まるで他人事だな。

自分のクラスの将来がかかっているというのに。

コイツわかっているのか？

「……………わかった。お前も頑張れよ」

輝の様子に少し怒りを覚えながらも俺はそれだけを言い残し、戦況を見に教室を出た。

廊下は教室とは違い、熱気と喧騒にあふれていた。

第十二訓「クールが決していわけじゃない」(後書き)

輝はまだ傍観者です。

多分、次ぐらいから参加する気になっていくと思います。

第十三訓「主人公よりサブキャラのほうが多く出たりするよね」(前書き)

アニメ銀魂再開決定!!!ものすごくうれしいです!!!

第十三訓「主人公よりサブキャラのほうが多く出たりするよね」

輝サイド

シャツ

ふう………疲れた。

俺は今テストを終えてトイレに来ていた。

ただし、2年のいる3階ではなく一年のいる2階にだ。

なぜかという、いま3階でトイレをしているとBクラスのやつらにおそわれる気がしたからだ。

………決してRのほうじゃないからな!!

手を洗いハンカチで拭き、俺が3階に戻ろうとした時だった。

後ろから誰かに声をかけられた。

「あれ？黒川さんじゃないですか」

「あつ、本当アル」

振り向くとそこにいたのは、新八と神楽だった。

そっぴや2年のBクラスとFクラス以外はもう学校が終わる時間か。

「よう、2人とも」

新八は「万事屋銀ちゃん」でアルバイトをしている男の子だ。

突っ込みを入れる能力が非常に長けているが、かなりのイジられキヤラだ。

一方の神楽も、同じ所でアルバイトをしている女の子だ。

ただし、彼女は中国人留学生なのでアルバイト先で生活させてもら

っている。

容姿は誰もが認める美少女だが、それとは裏腹にかなりの毒舌だ。よく沖田さんと喧嘩もしている。

「どうして2階のトイレに来てたんですか？2年生は3階ですよね？」

まあ、普通はそう思うな。

「実はな、今俺たちのクラスが試召喚戦争をしているんだ。その状況でトイレなんかしていたら危ないからな。特に2年は」「ああ、そういうことですか」

新八は苦笑いをした。

2年は他学年から見ても評判がそれほどよくない。

理由は問題行動が多いからであろう。

何かとこの学年は騒がしいからな。

静かな日がほとんどない。

その中でも特にFクラスは……………

「んじゃ、俺はそろそろ戦場に戻るよ」

「そうですか。気を付けてくださいね」

「せいぜい頑張るアル」

「……………神楽ちゃん、もう少し優しく言おうよ」

俺は新八と神楽に「銀さんによろしくな」と言って、3階に向かっていた。

第十三訓「主人公よりサブキャラのほうが早く出たりするよね」（後書き）

銀「おい、作者！！てめエどういことだ！！」

作「ど．．．．．どうしたんだよ銀さん。そんなすごい剣幕で」

銀「つたりめエーだ！！なんで神楽とダメガネが俺より早く出るんだよ！！」

新「ダメガネ言っなーっ！！」

作「それはサブタイトル通りだよ」

銀「納得いくかあーっ！！」

新「あれ？二人とも聞いてる？」

作「今の予定じゃ銀さんが出るのはAクラス戦後だよ」

銀「遅すぎだろっ！！」

新「てめエーら、人の話を聞けーっ！！」

第十四訓「災い転じて福となる？」（前書き）

作者・輝「みなさん、あけましておめでとうございます」「

作者「いやー、2011年が来ちゃいましたね」

輝「そうだな」

作者「ころ。少しは愛想良くしろ」

輝「めんどくせエ……………」

作者「……………こんなんですが、今年もよろしくお願いします
！！」

第十四訓「災い転じて福となる？」

輝サイド

熱気と叫び声であふれている中、俺は教室へと急いだ。
教室に戻ると吉井、坂本それに秀吉がいた。

「あれ？お前らどうしたんだ」

補給にでも来たのだろうか。

戦争開始からもうかなりの時間がたっているからおかしくはないしな。

「それがのう、輝」

秀吉が困った顔をして指をさした。

その先を見てみると・・・・・・・・

「な・・・・・・・・！！」

教室が数分前とは大きく変わっていることに気がついた。

穴だらけになった卓袱台や、へし折られたシャーペンと消しゴムが散乱していたのだ。

それはまるで小さな悪魔が暴れまわったような跡であった。
もちろんそんなことはないのだが。

「これは一体どういうことだ！？」

「実は・・・・・・・・Bクラス代表の根本恭二がやったのじゃ」

「根本」という名を聞いて俺はすぐに合点がついた。

根本は評判が悪いやつだった。

そのために数々の噂である。

例えば、カンニングの常連だとか。目的のためには手段を選ばないとか。

基本俺は噂を信じないタイプだが、根本に関しては違った。とにかくアイツは卑怯なやつだった。

根本「日本人の恥だ！！」

「これじゃあ、補給も進まないんじゃないか？」

「それは大丈夫だ。修復に時間がかかるだけだ」

「それならいいが」

表面上は冷静だったが、俺は復讐心で煮えたぎっていた。

まさか根本。キサマがBクラス代表だったとはなあ。

あの時の仕返し今やらせてもらうぜ。

「それはそうと、どうして輝や雄二は教室がこんなになっているのに気づかなかったの？」

吉井の質問で俺は我に返った。

まあ、教室に残っていたのは俺ら二人だけだっただからな。

「俺はテスト後にトイレに行ったから、その間にやられたようだな」

「俺は協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室を輝にまかせてしまっていた」

「「協定だと（じゃと）？」」「」

俺と秀吉の声が重なった。

「ああ。4時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

「姫路以外は、な」

吉井がなるほど、という顔をした。

一方の秀吉もそのことを知っているような雰囲気だ。

これほどまで心配されているということはよほど彼女の体力に不安があるのだろう。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね」

「その時はクラスの戦闘力よりも姫路と輝の個人の戦闘力のほうが重要になる」

といっても、俺の戦闘能力が高いのはあくまでも歴史だけだ。

他教科はBもしくはCクラスレベルだと思う。

一部を除いて……………

「それなら、今から輝だけをBクラスに送り込んだらいいんじゃないの？」

「……………吉井。俺は今さっきテストが終わったんだ。まだ結果が返って来るわけないだろ」

「あつ、そっか」

「だからお前はバカなんだ」

「なんだと！！このバカ雄二が！！」
「・・・・・・・・」

あきれてものが言えない。

もしかして、吉井は自分がバカだと思っていないのだろうか。

観察処分者なんだからそれくらいは自覚していないとそれはバカを通り越している気がする。

まあ、それならバカじゃないといえないこともないか。

「二人ともやめるのじゃ。明久。とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうで何かされているかもしれん」

「秀吉。がんばってこいよ」

「うむ。まかせるのじゃ」

俺が声をかけると秀吉はとて素晴らしい笑顔で返事をして、教室を駆け足で出て行った。

いつみてもあの笑顔には癒される。

一方の吉井も雄二との争いを中断して、秀吉の後を追いかけていった。

教室はまた静寂に包まれた。

途端に俺は冷めてきて、家に帰りたくなった。

たぶん、いても楽しくないからだろう。

いまだに俺は学校で自分の居場所を見つけられていなかった。
というか、見つけようとしていないだけなのかもしれない。

「坂本。今日は俺、することないよな」

「そうだな。テストも返ってきてないし」

「なら、帰ってもいいか？ちょっと用事があるんだ」

「そうか・・・・・・・・。まあ、いても仕方ないしいいぞ」

「サンキュー」

「それより、輝。明日は頼んだぞ」
「了解」

俺は荷物をかばんに入れると、急いで下駄箱にむかった。
途中でBクラスのやつらに会わないためだ。

それにしても、根本がBクラスだったとはな……。
ある意味沖田さんに感謝しなければならいかもしれない。
そして復讐の機会を与えてくれたFクラスに。

「……………久々に明日は荒れるかもな」

俺はニヤリと顔に笑みを浮かべて、足の速度を加速させた。
どこかで誰かの悲鳴が聞こえたが、俺にはその声が明日の根本の
声にしか聞こえなかった。

第十四訓「災い転じて福となる？」（後書き）

まだ、輝は冷めています。

たぶん、もうそろそろしたら明久達に溶け込んでいくと思います。

第十五訓「普段と仕事では態度は変わる」

輝サイド

只今の時刻は夜１１時。

いつもなら今頃俺は、駐屯所で帰る用意をしているはずだった。しかし、今日は違った。

といっても時々あるのだが、俺は数名の隊士を引き連れて「雫屋」という宿の前にいた。

どうやらここでテロの計画が立てられているらしい。

最近、日本でもテロ事件が多く起こるようになってきた。

しかもそれは政治家が関わっているところばかりだ。

理由は、今の政治家たちが外国に対して媚びへつらっている態度に対して腹が立っているからだろう。

かつて、「もはや戦後ではない」といった人もいるらしいがそうではないように思える。

今の日本は奴隷のようになってしまっている。

国民が怒るのも無理がない。

１０年ほど前にあった大きな内戦がその証拠を裏付けている。

・・・・・・話を元に戻そう。

そこで、俺たち１１番隊が出動したわけだ。

俺は入り口と裏口を見張るように言うと、残った隊士とともに宿の中に入ってしまった。

入るとすぐに女将さんがやってきたが、俺たちを見て驚いた表情になった。

「いったい何事ですか!？」と聞いてきたので事情を話すと、顔が青ざめたようになった。

真選組VSテロ犯が行われるということはここで血が飛び散るといふことを意味している。

一応任務はテロ犯の逮捕だけなのだが、大体相手は刀を抜いてくるのだ。

こうなったらこちらも刀を抜いて、斬らざるを得ない。

つまり、この店では人が死んだというレッテルが貼られるわけだ。すると自然と客数も減る。

お店にとっては非常に困ることであつた。

俺だつてもし可能ならばどこか山奥でことを終わらせたいと思う。しかし、理想と現実はいつもうまくはいかないものだ。

俺は目を閉じながら深呼吸をした。

これは俺がいつもする儀式のようなものだつた。

体の中から無駄なものが出て行く。そんな感じがした。

「行くぞ」

「……………はい！！」「……………」

俺たちは土足のまま上がると、音を立てるのに気をつけながら階段を駆け上がった。

そして、角を曲がり一番奥の部屋を目指した。

幸いこの宿はそれほど大きくなく逃げ場も少ない。

しかも目的の部屋には窓が一方方向にしかなく、下には隊士を待機させている。

部屋の入り口さえ防げばこちらのものだ。

部屋のふすまが見えてきた。

足を速める。

逃げられたらおしまいだ。

ふすまに手をかける。

先制攻撃を仕掛けてくるか。

緊張の一瞬だ。

ふすまを開く。

「御用改めだ!!」

「ちっ……!!真選組か!!」

部屋の中には浪人が5人いた。

どうやら全員俺たちには気づいていなかったようで、刀を床に置いたままだった。

「あきらめろ。お前たちはすでに包囲されている」

「あきらめろといわれてあきらめる俺らじゃねえんだよ!!」

浪人が全員刀を抜いた。

隊士もほぼ同時に抜いた。

だが俺はまだ抜かない。

「……今降参したら、命は助かるぞ」

「うるせエエッ!!」

浪人の一人が俺に斬りかかってきた。

それにつられるように周りの浪人もこっちに向かってきた。

刀が振りあげられる。

まだ抜かない。

刀の位置が下がります。

刀に手をかける。

俺と刀の距離数十センチ。

ヒュンツ・・・

カチンツ・・・

ブシャアッ！！

血が俺の体にぶっかかる。

斬られた浪人が目の前で倒れる。

「なっ・・・・・・・・！」

浪人たちの足が一斉に止まる

「・・・・・・・・やるのか？」

俺は顔にかかった血をなめながら相手を睨んだ。
まず鉄の味がした。

第十五訓「普段と仕事では態度は変わる」(後書き)

はじめて戦闘シーンを書いてみましたが・・・・・・難しいですね
(汗)

第十六訓「眠れない夜はいろいろと起こる」(前書き)

遅くなりましたが、バカテス第九巻発売!!

第十六訓「眠れない夜はいろいろと起る」

輝サイド

「はあゝっ、めんどくせエ……………」

俺は今駐屯所で報告書を書いている。

何かあったときはいつも書かないといけないのでホントだるいなにより細かく書かないといけないのが！！

今もなぜ浪人を一人斬ったのか説明しているところだ。

「はあゝっ……………」

俺はもう一度ため息をついた。

時刻はもう0時を回ったところだ。

今からだと寝るのは2時ぐらいになりそうだ。

明日起きられるだろうか。

「また活躍したみたいだね」

そんなことを考えていると、隊士が一人部屋に入ってきた。

「あつ。ザキ」

「お疲れ様。お茶でもどう？」

ザキの本名は山崎退^{やまざきなげる}。真選組の監察方で、優秀な密偵だ。

俺たちのような部隊とは別に、黒い噂が流れる場所に自ら乗り込む仕事をしている。

一応俺の先輩に当たる人なんだけど、俺が隊長になったときに「こ

れからはザキって呼んでくれていいよ」って
言ってくれたからこう呼んでいる。

ザキは俺が真選組に入ったときからの知り合いでずっと仲がいいんだ。

「ありがとう」

ザキが差し出してきたお茶を手にとり、口にもっていった。

ズズズツ……………

「いやー、仕事の後のお茶はおいしいな」

「何年寄りみたいなこと言っているのさ」

「それになんだか落ち着くし」

「……………本当に年寄りみたいだ」

何を言うのか。

お茶はどの年齢層にも愛されている素晴らしい飲み物じゃないか。
かつてお茶を巡って戦争が起こったくらいだ。

「そついや、またこちらの被害はゼロだなんてすごいな。これで何
回連続？」

ザキがお茶をすすりながら俺に質問してきた。

「さあ、何回かな？それにあまりたいしたことしてないよ」

「いやいや。被害ゼロなんて今までほとんど誰もしたことがないよ。

あの副長や沖田さんでさえ、いつも被害をだしてしまうんだし」

「そつだけど……………」

ザキは自分をべた褒めするが、これには理由がある。

副長こと土方さんや沖田さんは浪士の間でも名の知れた剣豪だ。

そのため、ほとんどの者は彼らとの戦いを避けようとする。

本来ならばそれを生かして、降参させることができる。

しかし、この二人。性格に少し問題がある。

二人ともかなり喧嘩っ早いのだ。

つまり、敵を見つけたらすぐに突っ込んでいくようなところがある。

これでは、被害が出るのは当たり前だ。

一方、自分ではできるだけ戦わないように心がけている。

というのも、何かの拍子にスイッチが入ると自分が興奮状態に陥る危険性があるからだ。

……まあ、この話はいずれどこかでしよう。

そこで俺はいつも相手に自分には勝てないと思いつまらせるようにしている。

それには、威圧と技術の2つが重要となってくる。

この2つが上手く組み合わせたとき、相手は自分に対して尊敬や恐れを抱くようになる。

俺からしてみれば、どちらも自分には欠けているように思えるのだ
が今のところは上手くいつている。

「そっちはどうなの最近」

さつきから俺の話ばかりだったので、今度は逆にザキに聞いてみる。

「うーん……。実は高杉一派の動きが怪しいんだ」

「なっ……。！！高杉が！？」

たかすぎしんすけ
高杉晋助。

攘夷浪士の中で最も危険な存在で、俺たちや政府が最も危険視している人物だ。

数々の破壊活動や政治家の惨殺を行い、今や日本中の誰もがその名を知っている。

しかし、その顔を知っているものは数少ない。

俺もいまだ見たことがなかった。

高杉は表に出て戦ったことがほとんどないからだ。

紅桜の件、真選組の内乱も奴が仕組んだものだった。（詳しくは原作を読んでください）

昔、攘夷戦争と呼ばれる内戦に参加していたらしいが詳しいことはよく知られていない。

ザキが少し深刻な顔をしながら俺に話し出した。

どうやら最近、高杉が兵を集めているような動きがあるらしい。

さらに、大江戸以外で高杉一派を見かけることが多くなっているとのことだった。

奴ら、攘夷浪士たちの活動の拠点は大江戸に集中している。

というのも、ここ大江戸は唯一帯刀が認められているからだ。

刀は武士の誇りだ。

手放そうとするものはきつとしないだろう。

だからこそここに集まる。大江戸

それなのにも関わらず大江戸外、つまり帯刀が許されないとところにわざわざ出ている。

帯刀しているのがばれたら即刑務所行きだ。

……なにか嫌な予感がする。

「明日も高杉一派を追跡するように副長に命じられているんだけど、あいつらかなり警戒心強くてさ。今日もバレかけたんだよ」

「それは危なかったな」

そんな風にたわい無い話をしているといつのまにか1時になっていた。

「それじゃあ俺はもう寝るし。輝も早く書き終えて帰りなよ。明日も学校だよな？」

「ああ」

「おやすみ」

そついうとザキは部屋から出て行った。

ま・・・・・・・・まずい！！

話しに夢中になりすぎていてこんなに時間がたってしまった・・・・・・

この時間土方さん、もう寝てるよ！！

結局俺は、提出を明日一（というか今日の夕方）に回し帰宅をすることにした。

帰宅準備を終えて部屋を出ると、駐屯所は不気味なほど静まり返っていた。

ただいまの時刻午前1時30分。こんな時間に起きているのはこの駐屯所では俺ぐらいだろう。

ヒタヒタヒタ・・・・・・・・

荷物を持って縁側兼廊下を進んでいく。

各部屋からは、隊士たちの寝息がかすかに聞こえてくる。

俺も早く帰って寝たいものだ。

「・・・・・・・・お・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

「!？」

突然どこからか気味の悪い声が聞こえてきた。

辺りを見回してみたが誰かがいるような気配は無かった。

しかも、この時間。俺以外に起きている奴がいる可能性は少ない。

．．．．．きっと気のせいだろう。

俺は足を一步前に踏み出した。

「おた．．．．．さ．．．．．!!」

「!!??」

と同時に、今度はさっきよりも声が大きく聞こえてきた。

こ．．．これは．．．まさか．．．．．

と思ったと同時に俺は走り出していた。

正直に言うけど、俺は幽霊とかそういう類のものが大の苦手なんだ
!!

心臓の動機はさっきから一向に激しくなる一方で、体中からは汗が
出ている。

それは運動によるものではなく、焦りと恐怖からだった。

は．．．．．早く、ち．．．駐屯所から出ないと．．．．．!!

俺は気が気でなく、ただ出口へと向かった。

そして厠の前を差し掛かったとき・

事件は起こった。

「ハア、ハア、ハア…………お妙^{たえ}さああー…………ん!!」

近藤さんの声かよおおおつつ!!!!!!
ってかなんで「検閲処分」ニーしてんだよ!?
しかもこのタイミングで峠を越えるなああつつ!!
リアクションに困るって!!

ガチャ……………

「おつ。輝じゃないか」

しかも何でこの人こんなに自然なの!?

明らか自分今まで「検閲処分」にしてたけどなにか？って感じなんですけど！！

「お．．．．．お疲れ様ですっ！！」

「ああ、おつかれ。って急に俺から視線を逸らしてどうしたんだ」

「いやあ、だってねえ．．．．．」

「ははあ．．．．．。さてはさっきまで人には言えないような、
いかがわしいことでもしていたんだな」

「いや。むしろしてたの近藤さんじゃないですか！！」

「．．．．．なんだと」

はっ．．．．．！！つい言ってしまった！！

「俺はただ、お妙さんとの愛を育むための練習をしていただけだ！
！」

「それがいかがわしいんでしょうがアアアアっ！！」

どうして真面目な顔で下ネタを言うんだろうか．．．．．。
しかも、お妙さんとは結ばれていないでしょうが。むしろ拒絶されてるし。

嫌だ嫌だも好きのうち、なんて言葉が世間にはあるが嫌なもんは嫌だということにいいかげん気づいてほしい。

「何がいかがわしいものか。もしものために準備をすることは大切なことだぞ。備えあれば憂い無しというだろう」

「なんでだろう。いいこと言っているんだけどまったくそうに聞かない．．．．．」

「まだまだ甘いな、輝。お前もあと十年したら俺の気持ちかわかる

はずだ」

「絶対わかりたくないイイツつ!!」

この人は近藤勲^{こんどういさお}。真選組の局長をやっている人だ。
隊士たち（ちなみに俺も）から多大の信望を集めている。
でも今みたいなことが多いのでほんとやめてほしい。

「しかしこんな時間まで残業とはな。輝は隊士たちの鏡だな!!」
「あ……ありがとうございます」

近藤さんが肩にポンと手を置いて褒めてくれた。
……さっきまでザキとしゃべっていたことは内緒にしてお
こう。

「それじゃあ、俺は明日学校があるんで」
「おお、そうか。こんな時間だし気をつけるんだぞ」
「はい」

そういうと俺は近藤さんの横を通り抜けた。
そして2メートル近く離れたとき、俺はふとあることに気がついた。
近藤さんが廁から出てくる前に水の音がしてないような……。

俺は慌てて振り返った。

「近藤さん!!」
「ん? どうしたんだ」

一方の近藤さんはゆっくりと落ち着いた様子で俺を見た。

「近藤さん、手……洗い……ましたか?」

「あつ………忘れてた」

「嘘でしょオオオオオつつつ！！！？！？」

普通トイレから出てきたら手を洗うでしょ！？

何で忘れるの！？

しかも「検閲処分」二ーしたあとだし！！

早く帰って洗濯しないと俺の制服が汚染される！！

「つたく………誰だ、こんな時間に。ギャーギャーうるせエ
んだよ」

すると近藤さんの後ろから土方さんが現れた。

ひしかたとうしゅう
土方十四郎。「鬼の副長」と呼ばれる真選組の副長だ。

「聞いてくださいよ、土方さん！！近藤さんトイレした後、手を洗
わないんですよ！？」

「いや、誰だつてしてるだろ？なあ、トシ」

「してませんっ！！」

確かにどこかのおっさんとかは、駅のトイレを使用した後に手を洗
わずに出ていたりするけど！！

普通はそんなことしないのが当たり前なんだ！！

「ハア………近藤さん。いつも廁から出た後は手を洗つて
くださいって言っているじゃないですか」

土方さんはひとつ長いため息をつく、あきれたように近藤さんを見
た。

「それより輝。さっきから叫びすぎだ。うるさくて寝られねエじゃ

ねエか」

「す・・・・・・・・すいません」

確かに俺にしてはみつともない。
あまりにも取り乱しすぎだ。

「それじゃあ、さっさと家に帰れ。明日はまた学校だろうが。遅刻する気か？」

「あつ・・・・・・・・。は・・・はい。わかりました」

「気をつけろよ。辻狩りが減ってきているといっても世の中物騒だからな」

「肝に銘じておきます。それでは」

俺は土方さんと近藤さんにサヨナラをいい、今度こそ出口に向かった。

結局、俺が寝たのは3時過ぎだった。

第十六訓「眠れない夜はいろいろと起こる」(後書き)

なんか山崎だけ人物紹介が長くなってしまいました……。
次はキャラクター設定を一つ挟みたいと思います

キャラ設定（真選組篇）（前書き）

現時点での真選組の設定です。

キャラ設定（真選組篇）

名前 近藤 勲 こんどう いさお

身長 184 cm

誕生日 9月4日

隊士たちから多大の信望を集める真選組局長。「人のいい所を見つけるのは得意だが、悪い所を見つけるのは苦手」と言われるほどにお人好し。また、漢らしさと慈悲深さを兼ねそろえる。しかし、新八の姉のお妙に対しては一方的な好意を抱き、悪質極まりないストーカー行為を行っている。本人はあくまでも“愛の狩人”のつもり。輝の実力を認めており、将来は土方のような存在になるだろうと考えている。

名前 土方 十四郎 ひじかた とうしろう

身長 177 cm

誕生日 5月5日

クールで熱い真選組の副長。「鬼の副長」と呼ばれる。勘が鋭く頭も切れるため、「真選組の頭脳」としても認められ、近藤とは対照的にスパルタな言動で隊を引っ張っている。普段はニヒルかつ直情的、無愛想で意地っ張りな態度で、プライドが人一倍高い。一方で意外に面倒見が良かったり不器用な優しさを見せたりもする。過激な発言を好む部分があるが、基本的には常識人で上にも下にもフオ

ローができる。昔は誰ともつるまぬ一匹狼で、数々の有名不良グループをつぶしてきた。そんな中で近藤に拾われて恩義を感じて以来、近藤を心から慕い、自らの「大将」としている。隊の中でも人一倍真選組を大切にする。輝とは彼が真選組に入る前に会っており、輝が入るきっかけにもなった。また、輝がかつての自分と似ているところがあるので、表にこそ出さないものの心配している。銀さんとはライバル関係で、剣術では劣るが知将といわれるように頭脳面では勝る一進一退の関係。実は似た者同士で幽霊と歯医者が苦手（ちなみに輝は幽霊のみ）。極度のマヨラーであらゆるものにマヨネーズをかけて食べる。丼1杯の白米の上にマヨネーズをかける通称「土方スペシャル」は、一般人が食べれば一瞬でノックアウトしてしまう。輝が最初の事件を解決した時にお祝いとして食べさせたが、当の本人は一口目で冥土に行きかけた。それ以来、輝はマヨネーズを一口もしていない。

名前 沖田 おきた 総悟 そうご

身長 170 cm

誕生日 7月8日

副長の座（土方の命）を狙う真選組一番隊隊長。語尾に「〜でさア」「〜ですぜイ」と付けてかつたるく喋る江戸っ子口調が特徴。見た目は童顔で甘いマスクのさわやかな美少年だが、腹黒・毒舌・ドSである。短い時間で女性を自分に絶対服従の下僕に調協できる。しかし、ナイーブで打たれ弱く不器用な面も持つ。副長の座を狙っており、常日頃から隙あらば土方を引きずりおろそうとしている。近藤のことは心から慕っており、彼に刃をむける者に対しては容赦ない。剣の腕前は真選組随一。輝にはいつもイタズラをしており、そ

のやりすぎのため輝は沖田に対して苦手意識を持っている。その一方で、剣の腕は認めており行動を共にすることもしばしばある。一応、近くの高校（文月学園ではない）に通う高校3年生で頭はあまり賢くない。だが、密かに自身の研究所で新薬や毒の研究・開発に営んでおりその功績は世界中の学会で注目を浴びるほどである。その目的は土方に対して使用するため。得意科目はもちろん化学と生物で、この二つに限っては常に学年トップである。すこし遅れて数学がついてくる。

~~~~~  
やまなき さがる  
山崎 退

身長 169cm

誕生日 2月6日

真選組の監察方（密偵）。優秀な密偵であり、他の部隊とは別に、黒い噂が流れる場所に自らが乗り込む密偵の活動をしている。密偵の割には何かと口が軽い所が欠点。仕事には忠実だが、暇さえあればミントンをしている。張り込み中の食事はあんパンと牛乳のみにするようにしている。常識人で基本は突っ込み役。輝が入隊した時に最初に話しかけたのは山崎で、それ以来輝とは仲が良い。実は沖田とは同じ年で同じ高校に通っている。仕事上立場は沖田のほうが上なので「さん」づけして呼んでいる。学力は沖田よりも上だが平均的。得意科目は特になし。

## キャラ設定（真選組篇）（後書き）

今後、設定内容が加わっていくかもしれませんが。  
しかし、沖田に関しては確実です。  
というのも沖田もバカテストメンバーと関わらせていくつもりだからです。

## 第十七訓「主人公は遅れてやってくるもの」(前書き)

バカテスト 【英語】

問 『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good - better - best  
bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

教師のコメント

まともな間違えで先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は -erや -estをつけるだけではダメです。

覚えておきましょう。

黒川輝の答え

『bad - worse - okita』

教師のコメント

君がオキタという人物をひどく憎んでいることが理解できました。

土屋康太の答え

『b a d - b u t t e r - b u s t 』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

第十七訓「主人公は遅れてやってくるもの」

輝サイド

朝というものは素晴らしいものだ。

というのも睡眠中に頭の中が整理され、一日の中で最もすっきりとした気持ちでいられる時間帯だからだ。

様々な分野の偉大な人物たちも朝は脳がよく働くとやっている。

それに、朝日が眠っていた街に降り注ぐ様子はなんとも趣き深い。そして、そんな朝をゆつくりと過ごすのが俺の日課だ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
普段なら。

「寝過ぎしたアアアアーーーーっ！？」

ただ今俺は学校への道を全力で駆け抜けている。

というのも朝起きてみれば登校時間をはるかに越えていたのだ。

どうやら無意識のうちに目覚ましを止めていたらしい。

やはり、昨日あんなに遅くまで起きていたからだろう。

でもおかげでいつも多めに寝られたぜ

・ ・ ・ ・ ・ なんていつている場合じゃねエだろ俺！！

坂本になんて言い訳すればいいんだよ!!

~~~~~

とまあ、なんとか学校に昼前までにつくことができた。
よかったよかった。

早速今から教室のほうに……

「黒川！！いつたい今何時だと思っているんだ！！」

「げっ！！鉄人！？」

し……し……しまった！！

言い訳ばかり考えていて鉄人のことを忘れてた！！

鉄人は全力で俺のほうに向かってきた。

走った後にはもうもうと砂埃が舞い上がっていた。

す……す……すごい迫力だ。

「お……おはようございます」

「なにが『おはようございます』だ！！貴様、今日は試召喚戦争の
はずだろうが！！もうとつくに始まつてるぞ！！」

「す……すみません。呼吸困難に陥って倒れた女性を助け
ようと人工呼吸を行っていたらその人の彼氏がやってきて『よくも
俺の彼女に……！！』って追いかけられていたんです。し
かも、どこから持ち出してきたのかその人ナイフを持っていたんで
すよ。それを見た誰かが警察に連絡してパトカーまでが出てきて、
ついには報道陣までが……」

「本当はなんなんだ（ギロリ）」

「……寝坊です」

怖すぎだよこの人！！

一瞬首を絞めてくるのかと思ったよ！！

「ハア………。言い訳をするならせめてもつとマシなものにしろ」

「すみません………」

我ながら上手い言い訳だと思ったんだが……。
やはり鉄人の目はごまかせないか。
補習受けたくねエなあー……。

「普通なら補習を受けさせてやるところだが……。今回は大目に見てやる。いつもちゃんと来ているからな」
「本当ですか!？」

すごい奇跡があるものだ。

あの鉄人が見逃してくれるとは……!!

明日は空から飴玉でも降ってくるんじゃないだろうか。

「今失礼なことを考えていなかったか？」

「めっそもございませんお代官様!!」

「……。お前はいつたい何時代の人なんだ。とりあえず今から職員室に来い。遅刻届を書かないといけないからな」

「めんどくせエ………」

「………」

「わかりました西村先生」

~~~~~

「ドアと壁をうまく使うんじゃ!戦線を拡大させるでないぞ!」

うわぁー……。

すごいことになってるな。

秀吉もいつもとは違って本気の顔だ。

先ほど職員室からやってきて、只今１２時ちょっと手前。そろそろお昼時だというのにいつこうに戦争が終わりそんな気配は無い。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補強も念入りに行え！」

秀吉の檄が飛ぶ。

しかし俺はここで妙なことに気がついた。

なぜ秀吉が指揮を取っているんだ？

確か指揮を取るのは姫路の仕事だったはずだ。

周りを見渡してみると……いた。

両クラスが入り乱れている中に一人桃色の長い髪をした女の子が。

何で総司令官のアイツが指示を出してないんだ！！

がそんな思いは泡のように、湧いてきてすぐに消えた。

見ると様子がおかしい。

姫路は何かにおびえている顔をしていた。

俺は今まで様々な罪人の顔を見てきた。

あの顔はそれだ。

では、何におびえているんだ？

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

俺の思考をかき消すように声が聞こえてきた。目をやると古典の竹中先生がいた。

「姫路さん、左側に援護を！」

「あ、そ、そのっ……！！」

吉井が姫路に援護を要求したが、姫路は齒切れの悪い答えをしただけだった。

泣きそうな顔で。

……仕方ねエ。

俺は急いで左側の出入り口に向かっていった。

「Fクラス黒川輝。援護にきました」

『『『『『『黒川！？』』』』』』

俺が名乗りを上げたと同時に、Fクラスのほうからどよめきが起こる。

相手クラスのほうは……特に反応無しか。

どうせ雑魚が一人増えたぐらいにしか思っていないんだろう。ちよつとムカつくな。

そんなことを思っていると、少し遅れて吉井が走ってきた。

「輝！！今まで何していたのさ！！」

「あ……悪い。寝坊だ」

「寝坊！？僕よりもひどい人なんて初めて見たよ！？」

「そんなことより「無視！」姫路の様子がおかしい。吉井。調べてきてくれないか？」

「……僕もそれは思っていたんだ」

吉井<sup>バカ</sup>にしてはなかなかいい目をしているな。

「今ヒドイこと考えてなかった！？」

「気にするな。あとこれは俺の感だが、これには根本が関わっているような気がする」

「根本君が？」

「あいつに君付けする必要はねエ。あいつは日本人の恥だ」

「日本人の恥って……。ところで、輝は大丈夫なの？」  
「任せておけ。これでも古典の点数はまあまああるし、指揮するのには自信がある」

まあ、これが本職なんだけどね。

「わかったよ。じゃあ僕は行ってくるね」

「おう。後で俺に報告してくれよな」

「まかせといてよ」

そういうと吉井は姫路の方へ走っていった。  
さてと、いっちょやりますか。

こうして俺にとって初めての試召喚戦争が幕を上げた -

第十七訓「主人公は遅れてやってくるもの」(後書き)

やっとここまで書けました・・・  
早く銀さんたちを出したいのに！！

## 第十八訓「ペース配分は考えましょう」

さつと周りを見渡し、現状を確かめる。

どうやら古典の教師は竹中先生一人だけのようだ。

そして次に戦力。

見る限りではこちらの戦力は残り3、4人といったところ。

対するBクラスは教室内の人数も合わせると5人以上いると考えられる。

つまり、このまま戦っても明らかに負けてしまう可能性が高い。

この状況を打開するための有効手段は -

戦力を増やすことだ。

そのためには古典の点数を補給しに行ってもらわなければならない。  
しかし、そんな余裕は無い。

ならば・・・・・・作るだけだ！！

「竹中先生、Fクラス黒川が召喚します。試獣<sup>サモン</sup>召喚」

「んじゃあ、こっちは高橋<sup>たかはしゆうすけ</sup>驚介がいきまーす。試獣<sup>サモン</sup>召喚、と」

お互いの足元から魔方陣が現れ、そこから召喚獣が浮かび上がる。

俺は、自分の分身である漆黒の侍に刀を構えさせる。

そして相手の方に目をやった。

相手は弓を武器とした召喚獣で、服装は古代ギリシャ人を思わせるものだった。

本人と同じ茶髪の頭には金色のオリーブの冠を・・・・・・

って、完全に。ツトじゃねエかアアアつつ！？

唯一違うといえば羽が無いということぐらいじゃねエかアアッ！！

「おっと、こいつはけっして。ツトじゃありませんよ。俺の分身イグルです。いや、ほんとですからね？」

「自覚症状あり！？」

著作権侵害じゃなか！！

。天堂に謝れ！！

しかも自分の召喚獣に名前をつけるなんてイタい！！イタすぎる！！

「……………なんか失礼なこと考えられていたような」

「気にするな。気のせいだ」

「ま、そういうことにしておきましょうか」

そういうと彼は前髪をフツと上に吹き上げて弓を構えさせた。  
ここからは真剣勝負だ。

|       |      |     |      |      |
|-------|------|-----|------|------|
| 『Fクラス | 黒川輝  | V S | Bクラス | 高橋鷲介 |
| 古典    | 168点 | V S | 154点 | 』    |

「うそーん！！それでも俺けっこうがんばったはずなんですけど」

そんなこと知りませんよ。

古典も結局は歴史とつながりがあるから取れるほうなんだよね。

「今のうちに消耗した奴は補給に回れ！古典の点数が残っている奴はいつでも出られるように！」

周りに残っているFクラスの面々にそう伝えると、俺は召喚獣を相手に向かって走らせた。

「それなら・・・・・・・・」

相手の。ツトもどきは素早い手つきで矢を放ってきた。  
身の危険を感じ取り、すぐに立ち止まらせる。  
すると、その矢は進路方向を防ぐように足元に突き刺さった。

「一歩も近づかせませんよ」

ニヤリと笑うと相手は再び弓を構えさせた。  
確かに、相手の弓の実力は見る限りでは高いほうだ。  
だが、弓などといった飛び道具には弱点がある。  
それは、動くものを狙いにくいことだ。速ければ速いほど。  
俺は指示を出し、相手の周りを全力で走らせた。

「くっ・・・・・・・・！！狙いにくい！！」

次から次へと矢を放ってくるが、全て俺の走った後に突き刺さっていた。

~~~~~

その状態をしばらく続け、俺は時を待った。
フィードバックで足は重くなってきた、息もだいぶ上がってきた。
それは相手も同じ。

いや、むしろ俺以上に苦しんでいた。
最初の勢いは今やどこへ行ってしまったのか、矢の精度は欠け、一本一本の間隔が長くなってきた。
本人も肩で息をして腕はほとんど上がっておらず、ほとんど手首と指だけで指示を出していた。

俺は常に日ごろから真選組で体を鍛えているのでこれぐらいは平気

だ。

そろそろ、勝負を仕掛けるか。相手もかわいそうだし。それに時間はもう稼いだからな。

相手が矢を放つと俺は一瞬で間合いをつめた。

相手は驚き、すぐに次の矢を用意しようとしたができなかった。もはや相手は腕に力を入れることができなかったのだ。

「なっ………!？」

「連続で射すぎだ」

俺は刀で相手の首を討ち取った。

『Fクラス	黒川輝	V S	Bクラス	高橋驚介
古典	168点	V S	0点	』

「は……ははっ、ま………負けちゃいましたね」

勝負がつくと相手は疲労とフィードバックによる痛みのため首を押さえながらその場に座り込んだ。

苦しそうだったがそれでも笑顔を忘れなかった。

「過去の自分が恥ずかしいですね………」

「でも、言うだけあって弓の腕はすごかったぞ」

「それはそれは。ありがとうございます」

そう言う相手は鉄人によって補習室に連れて行かれた。

それでは最後にもう一仕事しますか。

俺はその被害者になる人物に歩み寄った。

「竹中先生」

「？なんですか、黒川君」

そして俺は耳元で悪魔のささやきをした。

「・・・・・・・・カッラ、ずれていますよ」

「っ!!」

慌てて頭を抑えて周囲を見渡す竹ヅラ先生（笑）。

「少々席を外します！」

くっくくくつ。これでさらに時間ができるぜイ。
あつ、今の沖田さんみたいだった・・・・・・・・。

第十八訓「ペース配分は考えましょう」（後書き）

？「作者アアアつつ！！」

作「どうして隼人がここに！？出る作品間違えてるよ！？」

隼人（以下隼）「うるせえー。なんで鷺介が出てるんだよ」

作「いや、彼千歳じゃなくて高橋だからね」

隼「じゃあ、これはなんだ？（写真を見せる）」

作「・・・・・・いつ撮ったの？」

隼「企業秘密だ。それより、完全にこれ鷺介じゃねえか！！」

作「いやまあ、あのキャラが好きだったからね」

隼「はあ・・・・・・。ところで俺が出る予定は？」

作「ない」

隼「・・・・・・ブツ殺すぞコノヤロウ。ってかこっちの執筆もしろ」

作「一応やってるよ。でもセリフが難しいんだよ」

隼「まあ、頑張れ。えゝ、みなさん気が向いたら『俺たちに翼はない』symphonyも読んでみてください」

第十九訓「人はとにかく褒めに弱い」(前書き)

関係ないですが「俺たちに翼はない」のアニメが放送中です!!
やっぱり千歳鷲介サイコー!!

第十九訓「人はとにかく褒めに弱い」

竹ズラ先生と入れ違いになるように、吉井が戻ってきた。

「おっ、吉井どうだった？」

「……輝の言う通りだったよ」

「そうか。それでヤツは姫路に何をした？」

「……悪いけど、それは言えない」

見ると吉井は先程とは顔つきが違っていた。

目は怒りに燃えており、何かを決心した様子だった。

これでは、聞きだすこともできなさそうだ。

「……ならしかたねエな。それで、お前は どうするんだ？」

「今から雄二の所に行って、姫路さんを戦力からはずしてもらおうようにお願いするつもりだよ」

そこまで深刻なのか。

本当に根本は何をしたんだ？

「じゃあ、俺があいつの代わりに入ってもいいぞ」

「本当！？」

「ああ」

「ありがとう輝！！」

吉井は心からうれしそうだった。

まあ、あの日本の恥は排除したいからな。

あつ、もちろん殺したりはしないけどな。

……たぶん。

「雄二っ！」

「うん？どうした明久。脱走か、って輝！！お前今まで何してた！」

「悪い、坂本。寝坊した」
「寝坊って……」

明久が教室に勢いよく飛び込むと、坂本はノートに何かを書いているところだった。
見るとなにやら作戦を立てているようだ。

「ところで雄二。話があるんだ」

「坂本。俺もだ」

「……とりあえず、聞こうか」

俺と吉井は真剣な表情で坂本に話しかけた。

坂本もそれを察したようで、真面目な顔で俺たちのほうに向いた。
教室に張り詰めた雰囲気が漂いだす。

まず先に吉井が口を開いた。

「根本君の着ている制服がほしいんだ」

「……お前に何があつたんだ？」

シリアスな雰囲気無しだアアアアっつ！！！！！！
や、ヤバイ！！吉井がただの変質者にしか見えない！！

「ああ、いや、その。えーっと……」

自分の失言に気づいて吉井は慌てだした。

たぶん吉井が言いたかったのは「根本が制服に隠し持っているものを取り戻したい」といったところだろう。

でもそれはきつと姫路にとって大切で、誰にも知られたくないものに違いない。

だから吉井はあんなことを言ったのだろう。

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやろう」

ただ何も知らない坂本がどう受け取ったかは知らないけどな。

「で、輝はなんなんだ？」

「姫路を今回の戦闘から外して俺をその代わりとして入れてほしい」
「理由は？」

「根本を調きよ・・・ゴホン、根本と話がしたいから」

「今、調教って言いかけなかったか！？」

「サテ、ナンノコトヤラ」

「なぜ片言！？」

危ない危ない。

もう少しで口を滑らすところだった。

えっ？もうバレてるって？

気にしない、気にしない！！

「まあ、輝がいるならなんとかなるかもしれないな」

「それじゃあ・・・」

「ああ。姫路が担う予定だった仕事をお前がすることになる。必ず成功させる」

「悪いな、坂本。絶対に失敗はしねエから」

「良い返事だ」

フツと口の端を上げる坂本。
あれだけ迷惑をかけておきながら俺の願いを聞き入れてくれるなんて……………

「それで、俺は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。科目は何でもいい。それと明久。昨日言った作戦を輝に教えてやれ」

「わかったよ、雄二」

「それなら指揮の全権を俺に与えてくれないか？」

「……………つまり、総司令官にさせてくれと？」

「その通りだ」

俺は力強く頷いて見せた。

昨日の夜、秀吉に電話で坂本の作戦は聞いた。

だから、根本を叩き潰す作戦はもうできている。

しかし、そのためには少し人手が必要となるので、全体の指揮を取ることのできる総司令官という肩書が必要だった。

坂本は顎に手を当てて考えこみ始めた。

無理も無い。

坂本はまだ一度も俺の戦闘シーンを見たことが無い。

そんな奴にいきなりそんな重要な役割を与えられるわけが無かった。数秒の空白の時間の後、坂本は視線を俺に戻した。

「いいだろう」

「……………恩に着る」

俺は坂本に軽く礼をした。

「それじゃ、うまくやれよ」

坂本は立ち上がり、俺の肩を軽く叩くと教室から出ようとした。すると、吉井が後ろから声をかけた

「え？どこに行くの？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

そういうと坂本は不敵な笑みを浮かべた。
・・・面白くなりそうだ。

「二人とも」

教室を出る直前、坂本は振り向かず俺たちに声をかけてきた。

「お前らを信頼しているからな」

「・・・雄二（坂本）」

坂本は教室を後にした。

そういわれたらやるしかないな。
俺はグッと拳を強く握った。

「さあ、反撃の狼煙を上げようか」

第十九訓「人とはとにかく褒めに弱い」（後書き）

作「執筆が進まない〜!!」

輝「話のネタはあるんだろ？」

作「あるんだけど、上手く書けないんだよ……………」

輝「とりあえず書いていけよ」

作「そうしたいんだけど、納得できないものを出したくないんだよ。読んでくださっている方々のためにも」

輝「……………難しいな」

作「執筆のスピードは遅くなると思いますがよろしくお願いします」

輝「俺つばの方は？」

作「書ける」

輝「普通逆だろ!？」

第二十訓「鉛筆とかが走る音って妙に落ち着く」(前書き)

長い間空けてすみませんでした。

第二十訓「鉛筆とかが走る音って妙に落ち着く」

秀吉サイド

状況は大分キツクなってきた。おった。

教科をBクラスが得意な文系にされてからはずっと押されっぱなしじゃ。

それに加え、理由は分からぬが姫路の不参加。

これはかなりダメージが大きかった。

「秀吉!!」

どうしようか迷っているとFクラスのほうから走ってくる明久の姿があった。

「どうしたのじゃ、明久」

何かあったのじゃろうか。

そんな嫌な考えが脳裏をかすめた。

じゃが明久は来るや否、わしの顔をじっと見始めおった。
一体どうしたのじゃろうか？

「いやー、戦争中でもないやっぱ秀吉は可愛いね!!」
「.....」

じゃから、わしは男じゃと言っておるじゃろうが!!
わしはただひたすらあきれるばかりじゃった。
全く、こんなことのためだけに来たのじゃろうか？

「あつ、ごめんごめん。本当はそんなことじゃないんだ」

そういうと明久は今まで見たことが無いような真剣な顔をした。

「輝からの伝言で、『あと30分持ちこたえてくれ』だって」

「30分じゃと!？」

ざっと戦況を確認してみる。

圧倒的に人数が不利で、ほぼ不可能に近い状態じゃった。

「人手はこちらに回ってこないのかのう？」

「残念ながら、ほぼ全員補給テストしているよ」

「なんじゃと!？それで大丈夫なのか!？」

「いざとなったら輝が対抗するってさ」

どうやら輝は一斉攻撃を仕掛けるようじゃった。

おそらく、この作戦が勝負のカギを握ることになるのじゃろう。

わしは策を練ってみた。

この少ない手数でいかに現状を維持し続けるか。

じゃが、全くだいい考えは浮かばなかった。

こういう時、姉上ならすぐに見つけるのじゃろうなあ。

自分の頭を少し恨んでると、明久がポツリと呟いた。

「うわゝ、ずっと立ちっぱなしだからか先生たちがしんどそうだね」

明久の言葉を聞いて戦場に目をやると、生徒たちが熱くなっているのとは対照的に教師陣は見るからに疲れておった。

そっぴやずつとあそこにいるからのう……
ん?そっぴや!!

「明久、頼みがあるんじゃないが」

「頼み？いいよ。秀吉ならいつでも大歓迎さ！！」

うれしいことを言ってくれるのう。

やはり明久はいい友達なのじゃ！！

それに、きっとこの方法なら上手くいくはずじゃ！！

「それじゃあのう……………」

~~~~~

輝サイド

カリカリカリ……………

教室から補充試験を受けている音が聞こえてくる。

ただひたすらに鉛筆（まあ、ほとんどは、いや、もしかしたら全部シャーペンかもしれないが）が走る音は何となく気持ちのいいものだ。

なんというかこう集中力を高めてくれるような……………

ピンポンパンポーン

そんなことを考えていると校内放送が流れだした。  
一応、注意をそちらに向けてみる。

《連絡致します》

《竹中先生、竹内先生。お客様がお待ちです。至急職員室にお戻りください》

《繰り返します・・・・・・・・》

どうやらただの教師のお呼び出しらしい。

俺はすぐに飽きて時計を確認した。

「残り25分か・・・・・・・・」

俺は再び目を閉じてまた耳を傾けた。

カリカリカリ・・・・・・・・

~~~~~

明久サイド

校内放送が終わると同時に二人の先生をBクラス前へと連れて行く。その途中に、今までいた竹中先生と竹内先生とすれ違った。

ちらと顔を見ると両方とも助かったというような表情だった。

秀吉の作戦がどうやらうまくいったようだ。

そして、ついさっきのやり取りを思い出してみた。

『文系の教師を連れてくる？』

『うむ。そうじゃ』

『でも、今の状態じゃ教科を切り替えるのは難しいよ？』

『そうじゃ。じゃからわしが今からあの二人をBクラスから遠ざけ

るんじゃ』

『?どうやって?』

『今からわしが放送室に行つて誰か教師の声まねをして職員室に戻させるんじゃ』

『そんな!?だつてそんなことしたら……』

『もちろん、鉄人の呼び出しをくらうじやろう』

『だつたら……』

『じゃがな、明久。わしはみんなの力になりたいんじゃ』

『秀吉……』

ぐつと拳を握る。

秀吉のあの言葉を聞いた時、この戦争には絶対に勝ちたいと思った。それに、姫路さんのために。

そして、Fクラスのためにも……!!

「みんな!!真田先生(物理)と布施先生(化学)を連れてきたよ!!」

さあ、もうひとふんばりだ!!

~~~~~

## 秀吉サイド

わしが嘘の校内放送を流してからかれこれもう20分以上がたった。今のところ何とかBクラスを抑えられておるがもう限界に近かった。人数からしてこちらのほうが圧倒的に不利じゃった。

突如右側の出入り口から歓声が上がった。

驚いてそちらに目をやると……

「み、右側出入り口全滅!!」

鉄人に引きずられながら右側最後の戦力が叫んだ。  
やはり、無理じゃったか。

そろそろと教室から出てくるBクラスの生徒。  
このままでは、輝の頼みが果たせぬ!!

かくなるうえは………!!

わしが勝負を申し込もうとした瞬間――

「うおおおおおー………つつつ!!」

Fクラスのほうから慌ただしく、そして数多くの足音が聞こえてきた。

もしかと思い振り返ってみると………

「秀吉イイイ………つつ!!よくやったアアア………つつ  
!!」

「輝!!」

そこにはずっと待っておった希望の星がいたのじゃった。

第二十訓「鉛筆とかが走る音って妙に落ち着く」(後書き)

隼「やつと更新かよ」

作「ってかもう君ここに出てくるのが普通なんだね。まあ、文章がなかなか書けなかったからね」

**休載報告「あれこれ手を出すと失敗する」(前書き)**

中途半端なところで切ってすみません。

でもグダグダするのもよくないと思ひまして、苦渋の決断をいたしました。

休載報告「あれこれ手を出すと失敗する」

作「え、いつも『侍とテストと召喚獣』を読んでいただき誠にありがとうございます。実はこの度、この作品を一時休載するという形をとらしていただきたいと思います。読者の皆様には本当に迷惑をおかけすることをお詫び申す」「ちよつと待てエエッ（ちなさいっ）（ちなせイイっ）！」「グハアっ!？」

輝「おい作者！…どういうことだ！！」

優子（以下優）「そうよ！…あたしたちの恋愛話はどうなったの！」

銀「ふざけんじゃねエぞ！…この糞作者！！」

沖「これはお仕置が必要ですねィ」

作「ちよ、まつ………落ち着けつてギヤアアアっ！？」

くしばらくお待ちくださいく

銀「早速、納得のいく説明してもらおうか」

作「・・・・・・・・」

優「ちょっとやりすぎたかしら。動かないわよ」

輝「よし、ならこのスタンガンを使つて「作者復活!!」・・・・・・・・  
・ちっ」

作「今『ちっ』って言わなかった!? 明らかに舌打ちしたよね!？」

沖「さつさと始めてくだせィ（首輪を手にしながら）」

作「・・・・・・・・了解。大きく理由は三つある」

優「三つ?」

作「そう。一つはリアルが非常に忙しくなつてしまい、二作同時に書くことができなくなったから」

輝「それならこつちを優先すればいいだろ? なんであえてこつちなんだ?」

作「それが二つ目の理由。実は戦闘描写を書くのが苦手なんだ」

銀「確かに見てて思うな」

作「だからある程度知識を入れる期間がほしいんだ」

沖「それじゃあ、三つめは何ですかィ?」

作「『俺たちに翼はない』のアニメが終わったから」

輝「それはどういうことだ？」

作「ヒントはあれがどちらかというと世間一般ではマイナーであるということだ」

優「あっ！なるほど、そういうことね」

輝「わかったのか？」

優「ええ。つまり、こういうことよ。マイナーなものは人気はすぐに消えてしまう。特にああいふ類のものは余程のものではない限り頭の中に残りにくい」

作「俺は余程のものだと思っているがな」

優「この際、それは無視よ。アニメが終わったということはこれから続編でも出ない限り周知率は低くなっていく可能性がある」

作「ちなみに『俺たちに翼はない』のゲームは通常版となって発売中！！新キャラもいるよ！！」

優「……………ちょっと黙ってくれないかしら」

作「ごめんなさい」

銀「ようするに、みんなの記憶から消えてしまう前に作品を終わらせようという考えか」

優「そういうことになるわね」

作「正解。それにバカテスも銀魂も俺つばより人気があるし、他に書いてくれる人が大勢いる」

沖「確かにその通りですねィ」

銀「はあゝ。なら仕方ねエ。引き下がるぞ」

輝「いいんですか!？」

銀「まア、こんだけ理由があるんなら何も言えねエだろ」

優「そうね」

沖「帰りますかィ」

作「み、みんな・・・・・・・・!!」

「……………だけど……………」  
「発殴らせろ!!」  
「……………」

「ギヤアアアア—————つつつ!!——!!——!!」



**休載報告「あれこれ手を出すと失敗する」(後書き)**

本当に申し訳ありません。

実は再連載の見通しは只今のところ立っておりません。

来年受験生なので・・・・・・。

だから、もしこの作品を書きたいという人がいればその方にこの作品をお譲りいたします。

その際はメールをください。

要望があれば設定などをお送りいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5811m/>

---

侍とテストと召喚獣

2011年10月7日15時04分発行